



始



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70^{18m} 1 2 3 4 5



特102
55



情

稻岡奴之助著
八幡白帆畫







愛情

稻岡奴之助

(一)

愛情

東京！ あゝ東京！ 東京といふ二字が地方に生れて地方で育つた若い男女の心を
 什麼時めかすであらう？ 黄金の巷、歡樂の大都市、一たび其土地を踏めば誰でも
 功名富貴心の儘であるといふ觀念が強く彼等の頭腦を支配してゐるのだ。
 こゝにも一人、斯うした華やかな希望と限りなき榮華とを夢見て、今しも東海道の
 汽車に揺られて新橋停車場へ着いた若い美しい婦人があつた。
 全くこの婦人の美しさは廣い東京にも數あるまいと思はれるほどで、今着いた列車
 から吐出されて長いプラットホームを潮のやうに頽れて行く大勢の眼が等しくこの

婦人の上に聚つた、血色の好い白い顔やつやくとした髪の毛や、謂ふに謂はれぬ優しい愛嬌と神々しい誇を持つた眼、いや其れよりも姿の好いのと一種人を魅する表情とが、強く人々の注意を惹いた。

けれども、情けないことには、この婦人が東京からは遙に遠く西の方に離れた地方人であるといふことだけは直ぐ其身に着けてゐるもので釋まれた、束髪（たすはつ）の格構（かくこう）から着てゐる衣服（いふく）や帯（おび）、履（は）いてゐる足袋（たび）や下駄（くだ）の末（すゑ）にまで、婦人は十二分の注意（ちゅうい）を拂つてゐたのであるが其れが都人士（みやこじん）の眼（め）には寧ろ濃厚（のうこう）に過ぎて、餘りに脂肪（あぶら）の強い食物（しょくじゆ）を食（た）べさゝれるやうな心持（こころもち）がした、しかし美は何處（どこ）までも美で、同じブラットホームを歩いてゐる多くの貴婦人（きふじん）や令嬢（れいぢやう）は、何れも烈（はげ）しい妬（ねた）みの眼（め）でこの婦人（ふじん）を見て行つた。

恣（こゝろ）に大勢（おほぜい）の人（ひと）から自分（じぶん）を見られるのを、婦人（ふじん）は左（ひだり）ほど恥（はづ）かしいとも極（きま）りが悪いとも思（おも）はなかつた、自分（じぶん）の身邊（みよへん）から放（はな）たれる美（うつく）しき光（ひかり）が、是（こゝろ）等（ら）の人（ひと）々の視線（しせん）を悉（ことごと）く自分（じぶん）

の上（うへ）に聚（あ）めるのであらうと、何（なん）となく心（こゝろ）が勇（ゆう）んで、初（は）めて大都會（だいとくわい）の地（ち）を踏（ふ）んだ恐怖（おそ）いや不安（ふあん）は掻消（かき）すやうに無（な）くなつて了（しま）つた。

婦人（ふじん）は改札口（かいさつぐち）を出（で）て大膽（だいだん）に人波（ひとなみ）を掻分（かきわ）けて手荷物受取所（てにものうけとりじよ）に近づ（ちか）じた、其處（そこ）には今（いま）で見た貴婦人（きふじん）らしい人（ひと）や、令嬢（れいぢやう）らしい人（ひと）の影（かげ）は一人（ひとり）もなかつた、學生風（がくせいふう）の男女（だんなら）や、商人體（しやうにんたい）の人物（じんぶつ）や、職人（しやくじん）らしい男（をとこ）などが、互（たが）ひに揉（も）み合（あ）ふやうにして我（われ）一（ひと）にと手荷物（てにものうけ）を受取（うけと）つてゐた、其手荷物受取所（そのてにものうけとりじよ）の反對（はんたい）の側（がは）には、人力車（じんりきしゃ）の切符渡（きっぷわた）し場（ば）があつて、其處（そこ）にも人（ひと）は黒山（くろやま）のやうに聚（た）つてゐた、而（しか）して口々（くちくち）に何（なに）か叫（さけ）んでゐた、斯（か）うした中（なか）に立つて、手（て）づから手荷物（てにものうけ）を受取（うけと）らねばならぬかと思（おも）ふと、婦人（ふじん）は遽（た）に旅（たび）の寂（さび）しさを覺（おぼ）えたやうな氣（き）がした、片手（かたて）に荷物（にものうけ）の合札（あひだ）を握（にぎ）つた儘（まま）、後（あと）から來（き）たものに先（ま）んじられて泣出（なみだ）しさうになつてゐる時（とき）

「蘭子（らんこ）さん、久米（くみ）さん！」と、突然（とつぜん）後方（こうほう）から聲（こゑ）を掛（か）けて輕（かろ）く肩（かた）を叩（たた）いた者（もの）があつた。

蘭子は恁麼ところで思懸けなく自分の名を呼ばれたので、ハツと胸を躍らして振向くと、其處には久留米飛白の單衣に小倉袴を穿いて麥藁帽を被つた青年が立つて居た、

「あら里村さん！」と思はず小聲に叫んだ、

「貴方マア何うして恁麼場所に？」

「は、驚いたでせう、チャンと貴嬢と一緒に此の列車で来たのです」と青年は意味の深い眼光をして蘭子を瞻た、

「まあ！ ぢや貴方も昨夜この列車にお乗なすつたの？」

「え、爾うです、貴嬢は二等室、僕は三等ですから、貴嬢氣が付かなかつたのでせう」と里村青年は笑つた、色は小黒いが、凜々しい顔をした男の眼には勝利の色が

明々と釋まれた。

「まあ其様なことは後から悠々話すとして、貴嬢手荷物を受取るんですか」
「え、勝手を知らないものですから」

「爾うでせう、よろしい、僕が受取つて進ませう、合札は何れです」

里村青年は蘭子から手荷物の合札を受取つて、難なく二個の大支那鞆を驛員の手下ら受取つた、

「これと是れでせう、而して何うします此の荷物は、人車の札でも買ひましたか」
「いゝえ未だ……」

「何處まで行くんです」

「小石川の白山御殿町といふところへ」

「そりや大變だ、恁麼大な荷物があつちや電車にも乗れまい、ぢや僕が人車の切符を取つて進ませう」

「は、何うか……」

恁麼問答の中に、里村青年は甲斐々々しく蘭子のために奔走して、人車の切符を持つて来るやら、車夫を雇ふやら、主の前に對する侍者のやうに働いた、

「ちや此の車に乗つておいでなさい、一臺は荷物を載せ、一臺は貴嬢が乗れば可いんです、賃錢は其の切符に書いてあるだけ遣れば可いんですよ」と何から何まで心を付けた上、

「白山御殿町は何番地で何といふ家ですか、僕明日でも伺ひますから」

「百二十五番地で、堀川ツていふ家ださうです」

「御親類ですか、何です」

「いえ親類でも何でもありませんが、元父の役所に居た下役の方なので、兎に角當分下宿さして戴くことに父から頼んだのです、はア」

「爾うですか、ちや御面倒でも明日は早朝御伺ひします、僕の行く所は本郷です」

から、電車に乗れば十分と経たぬ中に貴嬢の下宿へ行けるのです」と里村青年は蘭子が車上の人と成つてからまで、其俤の前に立つて恁麼ことを云つた、若し事情が許すなら、此儘蘭子と別れないで、二人手を携へて東京の市街を歩いて見たいといふ氣が、蘭子には能く釋まれた。

蘭子は應て車夫が走り出すと、最う里村の事は全然忘れてゐた、高い洋館、廣い道路、自働車やら馬車やら、其れが縦横無盡に大道を縫うて、九月初旬の煌々光る正午の日光の下で活動してゐるのが、什麼も勇ましく心地好くて堪へられなかつた、クリーム色の洋傘をとほして、烈々たる太陽の光は身を焼くのであつたが、活氣に満ちた華美な都會の光景に眼を奪はれて、暑いとも辛いとも思はなかつた、

「妾も今日から帝都の人！」

蘭子は心の中で幾度も繰返して含笑んだ。

情 愛

帝都の人！ 蘭子が心の裡で叫んだこの言葉は、いかにも自分を能く知つてゐる言葉であつた、實際蘭子は地方で生れて地方で人と成り、而して地方の人として一生を終る者ではなかつた、帝劇の女優にでもしたら嗜好からうと思はれる其のスタイル、華美で浮々としておそろしく他をチャームする力を持つた總ての動作が、何うしても地方の婦人ではなかつた、いや地方の一婦人として自己の満足を充たすことは出来なかつた。

しかし地方と云つても、蘭子の郷里は都に遠い草深い片田舎ではなかつた、何と云つても第二の帝都と呼ばれる京都、何から何まで東京の眞似を仕たがる京都、歌舞伎座といふ劇場、明治座といふ芝居、それから第二國技館といふ相撲常設館さへ出て居る、所謂柳櫻をこきませた花の京都であつた、その京都の中でも殊に風雅び

情 愛

た洛西花園村であつた。

花園村！ あゝ名を聞いた丈でも好もしい村ではないか、其處には花で名高い仁和寺の御寺もあれば、臨濟宗大本山の妙心寺といふのもある、兼好法師の舊蹟として人に知られた双ヶ岡の松は不斷の翠緑を滴らして、北には御室の山が屏風のやうに立つてゐる、西は嵐山、乾の隅には愛宕の峰が雲を凌いで、南は八幡淀伏見、風光の美は拙い筆では書き盡せぬ好い村である。

村といへば藁屋根の點々見える寂寥い所であらうといふ感じは起るけれど、花園村には絶えず都會の風が吹いてゐた、昔から妙心寺門前は家並の揃ふた町ついで、東京の場末の町よりは遙に見好げであつた、而して村には相應の資産家も尠くはなかつた。

けれども蘭子の家は村では其れほどの家柄ではなかつた、先づ中の上といふ位のところ、先祖から傳つた家屋敷と、多少の田地と畑を有つてゐるだけで、その田地や

畑からの收穫だけでは逆も一家一年間の經濟を支へてゆく事は出来なかつた、其様な爲でもあらう、蘭子の父なる久米京二はずつと以前から稅務署の屬官を奉職して、同僚の判任官仲間では五十圓取りの上席を占めてゐた。

蘭子は實にその長女で、今年十九、村では評判のハイカラ美人であつた、いや姿かたちがハイカつたばかりでなく、心も中々のハイカラであつた、未だ村の小學校に通つてゐた頃から、頻りに新聞などを讀んで東京から來る新しい流行を追ふことに苦心してゐた、リボンの結び方から袴の穿き様までに彼女は一々深い注意を拂つた、其故でもあらう、蘭子は何時も同窓の少女仲間流行の魁をしてゐた、其れが又彼女自身の非常な誇りで、村第一の資産家や村第一の名望家の嬢様達にも決してヒケは取らなかつた。

「人間には分相應といふ事を知るのが大事で、決して分に越えた希望を起したり身分不相應な贅澤をしてはならぬ、此學校には爾ういふ方はあるまいが、其程富豪で

もない家の子で富豪の子の着るやうな着物を着飾つたりするのは、善い事ではありません」と或時學校の先生が、蘭子に當て、修身の時間に斯ういふ講話をした事さへあつた。

蘭子は小學時代から恣に虚榮的であつたが、其代りに學科も中々良く出來た、甚麼時でも級中の首座を占めて、決して二番とは下へ下らなかつた、詰り蘭子は學校の華で、亦花園村の名物であつた。

それが今年の四月、矢張り首席で市の高等女學校を卒業したのだから堪らない、さらぬも上へくと向上に氣を苛つ彼女の眼中には、此時モウ花園村も京都もなかつた。

(四)

「ねお父さん、遣つて頂戴ね、後生ですから、妾この願ひが叶はなかつたら本統に

最う……」

今年の夏の或る暑い日の暮方の事であつた、縁端近くへ高脚の塗膳を据ゑて今打水をしたばかりの庭の景色を眺めながら、毎晩二合と極である晩餐の一杯をチビリチビリと楽しんでゐる父の前へ坐つて、蘭子は首を斜にしたり身體に品をつくつたりして恚麼ことを云つた。

『は、は、又始まつたな、お前何故其様に東京へ行きたいのや』と父は笑ひながら凝乎と蘭子を瞻入つて猪口を下に置いた。

『何故ッてお父さん、昨日も爾う云つたでせう、ねえ千代ちゃん、貴方も聽いてたわねえ』

蘭子は父の側に慎ましやかに坐つて酌をしてゐる妹の千代子に加勢を需めた、千代子は黙つて笑つてゐた、蘭子ほどはハイカラではないが、其れでも姉に似て中々の美人であつた。

『は、は、千代が何知るもんや、そりやお前の云ふ事も私には能う釋つてはゐるけど、まあ能う考へて見て呉れ、宅の財産がお前を三年も四年も東京へ出して學問さすことが出来るか何うか、談は唯そこだけや、其れさへ解決が着けば私は異論はないのやけれど……』と、父は右とも左とも齒切れのせぬ恚麼返辭をした、而して又猪口を擧て、今度はチビ／＼ではなく頻りにガブ／＼呷り付けた。

蘭子には父の心が釋めぬではなかつたけれど、東京へ出たいといふ一念に此際中々家のためなどを思つてゐる暇はなかつた、いや假令家のためなどは一時犠牲にしても、自分が高等の學問をするといふ事は取りも直さず近き將來に於ける家のためではあるまいかと思つた、飽まで自分を信する事の厚い蘭子は、自分さへ成功すれば家も其れにつれて現在に幾倍した繁榮を見る事が出来るのであると思つたので、『ですけれど……』と蘭子は力の強い聲で父に抗辯して、時勢は最う高等女學校位を卒業した者などを其れほど重んじて呉れぬ事から、女でも高等の學問がなければ

ば社會の上層に立つて行く事が出来ぬ事や、自分は將來何としても一かどの貴婦人として世に立ちたいといふ希望を持つてゐると云ふ事やらを、其れからそれへと説明的に話した。

「ですから妾が卒業さへして了へば、お父さんにだつて恣意不自由たらしい生活はさして置きませんわ、お父さんは妾が女だから其様な女學校だけで勉強は廢して了へつて仰やるけれど、若し男だつたら、真逆中學切りで廢學さすつて譯にもいかないでせう」と、蘭子の眼は焔火のやうに輝いた、若し父が飽迄自分の望みを叶へて呉れぬなら其時は又自分には決心がと云つたやうな色が動いて、其れが父にも妹のお千代にも明白と推せられた。

「む、爾ういやマア其様なもんや」と父は少時考へてゐる容子であつたが、「それでは斯うせう、お前の云ふところにも一理はあるさかい、まあ行くなら往つて見て勉強して見ると可え、しかし何や、私の月給は五十圓やせ、可いかい、其内から二十

圓をお前の學資の方に廻すのや、中々並や大抵の奮發では出来ないこつちやさかいナ、お前も其れを能う覺えてゐて呉れて、充分勉強して希望通り偉いもんになつて貰はんと可かん、五十圓取のお役人の娘に二十圓の學資は分に過ぎてゐるさかいなア」と父はトウ／＼我を折つて了つた、家に大した財産があるといふでもないのに、僅か五十圓の俸給の中から二十圓を娘のために引去られるといふのは什麼も苦痛に堪へぬのではあるが、小學校以來絶えず優等で押通して來た蘭子の成績を思へば、蘭子の未來には光明が輝いてゐるやうな氣もして、其希望に任して東京へ出してやる事が、是れから父子が世に時めくの前程であるやうにも思はれたらしく、父は其れから又姉妹に酌をさせて、祝ひ心が平日よりも一二合多く過した。

斯うした事情の下で蘭子は今この東京へ着いたのであつた。

新橋から小石川まで往くには可なりの時を要する俵の上で、蘭子は恁麼ことを考へてゐた。

一時は逆も父の許可を得て出京する事はむづかしからうと諦めもし悲觀もしたのであつたが、其れが案じるよりも存外手易く自分の意見を容れられたので、其時の蘭子の得意は實に頂上に達してゐた、父は來年の春に成つてからと云つたが、蘭子は善は急げといふ諺もあるから、事が極つたら一日も早い方がいいと主張し、この九月の月へ入ると直ぐ取る物も取り敢へず、いや態と平生親しい村の人達にも通知せず、何事も手輕といふのを第一として今日といふ今日この東京の土を踏んだのだ。蘭子は多くの田舎者が爲るやうに俵の上で右や左を飽かず眺めた、銀座通の繁昌は故郷で想像した程でもないと思つた、それでも丸の内を通る時には流石に東京らしい匂がすると感心した、東京といふ所は、地方人が最初鳥渡見物したばかりでは、誰でも豫想した程でないと思つて失望するのであるが、儲だん／＼居なれ住みなれて見

ると、其時始めて日本一の大帝都たる眞價を味ふ事が出来るのであるといふ事は、蘭子は豫て人から聞いたり書物や雑誌で讀んで知つてゐたので、思つたほどでもない銀座の街に失望しても、心は何となく勇みに勇んで愉快で愉快で堪らなかつた。應て俵は白山御殿町に着いた、目ざして來た堀川といふ家は、是れも豫想とは反した見るかげもない小ぼけな家であつた、それでも低い二階家の周圍には杉の生垣が廻らされて、猫の額のやうな庭もあれば少々の空地もあつた、何うせ高が四十圓か五十圓取の役人の住居だものと蘭子は心の裡で含笑むだ。堀川の家では蘭子が今日着くと云ふ通知を得てゐたので、細君は朝から二階の六疊を綺麗に掃除して待つてゐた、丁度日曜に當つてゐたので、年中外出勝の主人も在宅してゐて夫婦が愛想よく蘭子を迎へた。

『貴嬢恁麼不潔いところでお氣に入るか何うだかと思つたんですけれど、何分御覽の通り恁麼に手狭なもんですからねえ、何うかマア當分此處で御辛抱遊ばしてね、

は、其代り貴嬢氣樂な事に掛けたら宅は日本一ですよ、家内は所天と妾の二人切りで、所天は毎日お役所へ出て五時頃でなけりや歸つちや來ませんし、一週間に一度は宿直があつて宅を明けるんですから、妾一人の時は丸で年中配流に成つてるやうで、本統に寂しくつて寂しくつて堪らなかつたんですよ、ですから御勉強なさるにや此上なしです、ほ、ほ、ほ、」

最う五十の飯にも近かりさうな、色の小黒い脊丈の低い細君が團扇の風を送りながら頻りと喋り立て、汽車の中は定めて暑かつたらうの、始めて新橋へ着いた時の心持は何うだつたの、來年は中央停車場が出来る筈だの、この小石川も近頃は開けて、見たところは恁麼寂しいところでも、つい其處まで出れば八百屋もあれば肴屋もある、呉服屋でも化粧品屋でもお望みなら何でも不自由はないだの、其處の電車の停留場まで歩けば、何處へ行くにも世話はないだの、のべつ幕なしに辯じ立てた。其處へ主人の堀川康人がミシ／＼階子を踏立て、上つて來た、胡麻鹽頭の瘦せたヒ

ヨロ長い人物で、鼻下には薄い八字髭を蓄へてゐた。

「暑い時は何よりも先づ是ですちや」と涼しさうなグラスの器に盛つた氷金時を持つて來た。

「貴方マア何だつて恁麼に手間取つてらつしやるんです」と細君は蘭子への馳走振りか白い眼をして主人に小言を云つて置いて、

「さあ貴嬢、解けない中に何うぞ召しあがつて下さいまし」と其を侷めた。

主人は慣れてゐるのか細君の小言を別に氣にも止めず、極く／＼人の好きさうな顔をして、是れは又京都の父の上を訊ねたり、蘭子に是れから何ういふ修業をする積りかなど、重い口調で話した。

蘭子は出された氷を慎ましやかに食べ、心の中で私に細君と主人の性質の異つた點を較べなどしてゐた。

其夜、蘭子は堀川の細君から本郷の大通りを散歩して見ませうと勧められたのであつたが、疲れてゐるからと断つて九時頃に蚊帳を吊つて其中へ入つた。

蘭子は白い敷布を敷いた布団の上に仰向けになつて凝乎と眼を閉つた、斯うして晝の疲労から脱れて安らげく夢に入らうとするのであつたが、初めて東京へ来たといふ喜悦やら希望やらで頻りに神経が興奮した、日本一の東京というても此邊は山の手の中の殊に閑静な町で、初秋の夜は未だ宵ながら森閑としてゐた、その寂しい夜の空氣を通して、何處からともなく時々電車の響が聞える、庭では蟋蟀が鳴く、蘭子は故郷の花園村を思ひ出して悲しいやうな氣がして來た、

「何です蘭子さん、貴嬢は其様な弱い氣で何が出來ます、貴嬢が京都の花園村から態々この東京へ出て來た使命は何であります、貴嬢の前途には光明が輝いてゐます、

情 愛

有らゆる富貴、有らゆる權勢、それは手を受けて貴嬢のおいでを俟つてゐるではありませんか、嗚呼何をクヨクヨ思ふ事があるもんですか、貴嬢の御容貌と學問智識、それは京都のやうな彼様な摺鉢の底を見るやうな小都市で一生をお暮しなさるに餘りに過ぎて居ります、世界の日本、その日本の東京、それが取りも直さず貴嬢を歓迎し貴嬢を成功せしむる舞臺です、何で彼様な山ばかり見える花園村なぞを戀しがる事があるもんですか!

と、天からともなく地からともなく、誰とはなしに恁麼ことを云つて自分を叱り罵りますものがあるやうに覺えて、蘭子は忽ち一寢反り打つて莞爾笑つた。

笑つた心には實際前途の希望が一杯に満ちてゐた、是から自分は女子大學へ入學して、應て卒業の暁は何うなるであらう、一かどの貴婦人として交際社會に立つのは、いや交際社會の女王として新聞雜誌に唄れるは何時の事であらう、黄金眞珠、金剛石にエメラルド、有らゆる寶石で此身此姿を光り輝かして、外務大臣の夜會に出た

情 愛

ら甚麼に楽しい事だらう……、恁麼空想は其れから其れへと何時までも續いた。

「ねえ鳥渡貴方、それでも久米さんのお嬢様思つたよりも別嬪ねえ、京都のやうなところにも彼様なハイカラなお嬢様があるとは思議ねえ、おほ、」

「莫迦な、京都だつて何だつて、それに久米さんは村の舊家だ」

「爾うですつてねえ、しかしマア善いわ貴方、是れから月々十二圓宛は久米さんから何するんでせう、ぢや今までの四十圓の収入が五十二圓に増えた勘定になるんだから、この米高に何れだけ助かるか知れないわ、彼様な優しいお嬢様ですものお米だつて何程あがるもんですか、高が知れてることよ」

「其様な賤しい事いふもんぢやない」

「だつて貴方、經濟は經濟ですから、それから先に何していかなきゃ、しかしマア好いわ、月々十二圓宛と餘分に入る事になれば……」

階下から夫婦の話す寢物語が微に聞えたので、蘭子が折角の空想は破れた、而も蘭

子は今聴くやうな實際問題の中に自分が入つてゐるのかと思ふと、淺ましいやうな情ないやうな氣がした。

翌日は思はず知らず寢過して、顔を洗つて食事を済ました時は九時少し過ぎてゐた、其處へ昨日新橋で逢つた里村青年が訪ねて來た。

(七)

「やあ昨日は失敬しました、何うです別に疲勞も出ませんでしたか」

里村青年は二階へ上つてからニコ／＼笑ひながら、昨日の旅装とは異つた蘭子の不斷姿、荒い模様の浴衣に紅なし友染の帯をしめてる艶な姿を染々瞻入つた。

「え、お蔭で別に、大層お早いですわねえ、ほ、」

「ナニ早いもんですか、最う九時は過ぎてます、僕が早いんぢやない貴嬢が遅いんだ」と、里村は袂から敷島の袋を出して、自分のマッチで火を點けた。

彼は昨日新橋で逢つた時と同じ飛白づくめの服装をしてゐた、それが蘭子の眼には何となく見すばらしく見えた。

「實は昨夜能く眠られなかつたのよ」

「うむ其様な事です、貴嬢にや始めて他人の家で寝たんでせうからね」と、里村は座敷中を見廻はしたり、肱掛窓から頭を突出して外を眺めたりした。

「しかし中々好い室ですね、此處なら能く勉強が出来るでせう」

「ほ、何うですか覺束ないもんです」

「つい此先に見えるのが白山神社の森でせう」

「爾うですかねえ」

「閑静で好い、僕も恁麼ところへ下宿したいもんだ」

「貴方の下宿つて其様なに好くないの」

「善いも悪いも、雑沓な町の真中で、其れに何の部屋も何の部屋も一杯で、喧まし

くつて可くない」

「其様なに大勢居なさるの」

「東京の營業下宿屋つたら實に言語道斷です、夜などは彼方の室で尺八を吹く奴があるかと思ふと、此方では浪花節なんかを唸り出すんだからねえ、爾うかと思ふと大な聲を出して愚にもつかん議論をするし」

「ほ、、、、寂しくなくつて可いでせう」

「蘭子さんのやうな陽氣な人には好いかも知れんが、僕には大閉口、今に何處か静な素人家を探して轉る積りです、僕には恁麼家が見付れば可いが……」

里村は頻りに此家を褒め立て、何度となく四邊を見廻すのだ、蘭子は東京の下宿屋が其麼東西かは知らぬけれど里村の談で大概は想像がつかぬでもなかつた、其れに較べると此部屋、餘り美麗にない六疊ではあるが、一間の床に隣つて一間の押入、南の方は一間半の肱掛窓になつてゐて、冬になれば此處から一面に暖かい太陽の光

が入るらしい、反對の北の方は洒落れた丸窓で、この窓から白山神社の森が見えるのだ、夏は涼しく冬は温かい座敷といふのは斯ういふのであらう、勉強するには成程好からうと思つた。

鳥渡話しが途切れたので、二人は少時無言でゐた、其時、階下から細君が茶盆と餅菓子とを盛つた錦焼の鉢とを持つて来た。

「貴方おいでなさいまし、何うか承はれば久米さんと同じ故郷ださうですが、久米さんもマア是れから私どもから學校へ通つて御勉強なさるツて云ふんですから、何分宜しく御願ひ申しますよ」と、そろ／＼例の辯舌を揮ひ出しさうなので、蘭子は手早く細君の手から茶盆を受取つて、

「小母さん何うも難有う、え、私が入れてよ」と、蘭子は自分で茶を注いで里村に進めた。

「此家の細君ですね」と、里村は細君が降りて去つた跡で笑つた。

「え、親切な方ですわ」

「爾うらしい、ところで蘭子さん、僕ア今日貴嬢を御案内せうと思つて来たのです、差當り上野へでも行つて見ませう、餘り暑くない中に出掛けませう」

「上野へですか」

「上野がおいやなら何處でも可い、淺草でも、日比谷の方でも、それから歸路には三越と白木屋へ寄つて見ませう」

「爾うですわねえ」

蘭子は何となく迷惑に感じたけれど、斷然斷るほどの勇氣もなかつた。

(八)

それから一時間の後、蘭子と里村青年は上野公園の奥を歩いてゐた。

「何うです中々立派な公園でせう、京都の嵐山や丸山も好いが、此處はこれで世界

的の公園ですからね、廣い事と云つたら非常です、先刻歩いて来たところが櫻雲臺といふので、此處は竹の臺です、そこに在る建築物が春秋二季に美術展覽會の開設せられるところで、向ふの高いのが博物館です」

里村は案内者らしい事を云つて頻りに蘭子の機嫌を取つてゐた、しかし恁麼に機嫌を取られても蘭子は何となく氣が浮かなかつた。

「この先に徳川氏の御靈屋があります、可なり立派ですよ、それに當時の大小名が奉納したといふ石の燈籠が澤山ありますが、大したもんですせ、序だから其邊まで行つて見ませう」

「ええ」

蘭子は詮方なしに頷いたが、心では其様なものは見たくもないと思つた。

「しかし蘭子さん、貴嬢は矢張り京都人だから、恁麼ところより京都の方が好いと思ふでせうねえ」

「爾うでもありません、ほゝゝ」

「何しろ東京といふ所は、風景だの名所舊蹟だの、以外に、住つてゐると謂ふに謂はれぬ味のあるところですよ」

是れには蘭子も異論はなかつた、けれども二人が恁麼ことを話して歩いてゐるのを、甲も乙も注意を拂つて見て行くやうな氣がした、其れが蘭子には什麼にも不愉快で堪へられなかつた、里村青年が今少しハイカラな氣の利いた青年であつたなら、蘭子は其れ程までも思はなかつたであらうが、何處かに京都風の、いや田舎臭味を帯びた、色の小黒い體格の不立派な、而して紺飛白の着物に小倉の袴を穿いてゐる見すばらしい風采が、虚榮に満ちた蘭子の眼には情けなく見えて、爾うした男と連立つて行くのが恥かしくて堪らなかつた。

里村青年は其様な事とは夢にも知らず、蘭子の浮かぬ顔色に氣が付くと急に眉を顰めた。

「貴嬢何うかしましたか」

「いえ別に……」

「何だか顔色が悪いやうですよ」

「光線の故でせう」

「光線！」

里村は空を振仰いだ、空は千年の樹木が枝を交へて日光を覆うてゐた、二人は此時人通りの少い森の中を歩いてゐたのであつた。

「それなら宜しいけれど、僕は非常に驚いたです、何うです、少時此處で休んぢや」と、里村は途ある樹の切株を見付けて、手早く手巾で塵を拂つた、

「さあ此所へお掛けなさい、僕は此方の方へ掛けます」

「其様な事しないで、早く歸りませう」と、蘭子はつぼめた洋傘を杖に掛けやうと仕なかつた。

「最う歸るんですか、何故です、何だか變です、ね蘭子さん、貴嬢斯うして僕と一緒に歩くのが否なんでせう」

「其様ことないわ、ほゝゝ」

「いや爾うです、屹と爾うです、先刻からの貴嬢の舉動が實に變だ」

里村青年の眼は煌乎と輝いた、而して聲はおそろしく震へてゐた。

(九)

午前十時を過ぎたばかりの上野公園の奥は何處にも物静であつた、さらぬも澄切つた秋の空氣が木の間から木の間を透して愈々清くなつて涼しく吹亘つた、時々高い梢でミンミンと調子をとつて鳴く秋蟬の聲や、サラ／＼と枝の鳴る音が、遠い遠い奥山深く分入つたやうに感じさせた。

蘭子は斯うした静寂な自然に接する事を嫌ふのではないが、恁麼自然の景色や趣味

は厭といふほど京都で味うて来た、其れよりも今少し繁華な、自働車が飛んだり電車が走つたりする寧ろ俗氣の充ち／＼た廣い熱踏な東京の町を、其れから其れへ歩きたいと思つた、けれども今日の案内者たる里村青年が切株に腰を掛けたまゝ、何時まで経つても其處を離れやうとせぬので、丸で役目に取りられたやうな氣で呆然立つてゐた。

「蘭子さん」と、里村青年は熱心な聲で呼掛けて、

「貴嬢は昨日偶然、いえ突然新橋で僕の姿を見た事に就いて、何う考へました」

「何うツて、何を」

「僕が詰り貴嬢と同じ汽車で、この東京へ出て来た事に就いて、」

「其様な事妾には分りませんわ」

「分らない、お分りにならない、貴嬢に分らない」

「え、」

「宜しい、分らなきや云ひますが、僕は貴嬢が東京すると聞いて、早いところ其跡を追うて来たのです、僕は貴嬢といふ人は實に無情な人だと思ふです、是れまで那麽親しくした貴嬢と僕との仲で、東京へ出るなら出ると豫め一寸報らして下さつても罰は當らなかつたでせう、其れに一言の報知もせず、寧ろ秘密にするやうにして故郷を立て了ふとは餘り酷いぢやありませんか」

里村青年はぼつ／＼恚罵女々しい怨言を並べ出した、蘭子は其れが蒼蠅くてならなかつた。

「だつて、其れは貴方ばかりぢやないわ、今度は甚麼お友達にも無斷で来たんですもの」

「そりや友人や何かには其れでも可からうが、僕には酷い、僕は或る人から貴嬢が急に東京へ出るといふ話を聞いて、最う貴嬢から僕に話があるか、今日は其談に來て下さるか、と毎日心待に待つてゐたんですが、何時まで経つても更に其様な沙汰

もない、其内に愈々貴嬢が立出なさる日や時間までも探り得たので、僕は貴嬢には知れぬやうに同じ列車の三等に乗つて斯うして出て来たのです、貴嬢は僕を可哀さうだとは思ひませぬか」

里村青年の舌は燐火の燃えるやうであつたが、冷たい蘭子の身も心も焼く事は出来なかつた。

「ほゝ、まあ其様なにまでして、御苦勞でしたわねえ」

「ナニ御苦勞、蘭子さん、貴嬢は僕を嘲弄するんですか、貴嬢は曾て僕に何と云ひました、僕と甚麼約束しました、忘れもしない去年の秋です、月の渡月橋！ 貴嬢は其時の言葉を忘れましたかッ」

月の渡月橋！ それは憐れなる里村青年の心に一生拭ふ事の出来ない印象をとめてたのであつた、あゝ月の渡月橋！ 蘭子もこの一言には胸が騒がすにはゐられなかつた。

(10)

「あら貴方怒つたのねえ」

蘭子は少しく男の機嫌を取り氣味に、

「其様なこと云はないで早く淺草へ行きますせう、妾恁麼寂しいとこ厭だわ」と、身體に品をつくつて里村青年の立つ事を促した。

「行きます、淺草へでも何處へでも、貴嬢のお好きな所なら地獄の底へでも行きますが、まあ僕の云ふ事をお聴きなさい、其れから先に解決して措かないでは」と、里村は中々動きさうにも仕ない、而して怨みを帯びた口調でクドク過去を繰返した。

この里村といふのは、蘭子と郷里を同じうした京都の花園村の農家の倅で、蘭子には三歳の年長で今年は二十二、名は健三といつて、曾て村の高等小學を優等で卒業すると間もなく、法律を研究すると云ふ目的で出京し、首尾よく本郷に在る京華中

學を卒業した上、某私立大學へ籍を置いたのであつたが、折角その大學へ入學した一昨年の夏、彼は突然猛烈な脚氣症に取り付かれて暫々歸國する身となつた、しかし故郷の土を踏んだので間もなく脚氣は治つたが、一時心臓に異状を起したのが痼疾となつて再度の出京も心に任せず、云はゞ大志を懐く身で心ならずも故郷の山水に親しんでゐたのであつた。

幸ひに里村の家には財産があつた、殊に健三は次男で、家事に携はる必要もなかつたので、彼は兩親の許可を得て心の儘に養生してゐた。

蘭子の家と里村の家とは同じ村でも字を異にして大分離れてはゐたが、何事にも華麗を好んで新奇な事が好きである蘭子は、この東京歸りの里村青年を何となく懐かしく思つた、健三の方でも村第一の美人の聞えある蘭子、高等女學校の才媛？といふ評判のある蘭子を尊敬もすれば慕はしくも思つた。

斯うして若い青年男女は互ひに心と心が接近して、何時の間にかやう親しい友垣を結

んで了つた、里村青年と蘭子の繁々往來したり、時々手を携へて其處此處と散歩するのを見て、教育のない村の若い男女は何かと噂も立てたが、蘭子にも健三にも決して心に顧みて疚しい點はなかつた、それを蘭子の父も健三の双親も能く知つてゐて、二人の相親しむのを嫌はなかつた、いや嫌ふどころか、彼等は心私に未來を描いて、法律家を理想とする健三を久米家の養子として蘭子に配するのは、兩家のためにも當人同志のためにも無上の幸福であらうと思つてゐた。

一年半ばかりも双方から往來してゐる中に、蘭子と健三は愈々親密の度を加へて、彼等同志も互ひに將來の幸福をそれとなく胸に懐いてゐた。

それを双方から好い機會があつたら語り合はう、語り合はうと思つてゐたのであつたが、流石に其れを明白に云出す勇氣は何方にもなかつた。

しかし、斯うした心と心は口に出さずとも互ひの舉動や眼光に顯れた、それが漸次漸次に接近して來て、遂に心と心を打明合ふ機會は來たのであつた。

機會といふのは去年の秋、陰曆七月十六夜の事で、二人が月明に乗じて嵯峨へ散歩に出掛けた時であつた。

(一一一)

法律のやうな理窟張つた學問を専攻するより、寧ろ文學の方へ走つた方が可からうと思はれるほど、里村健三は感情家であつた、一ツは過去二年間も心臓に疾患を持つてる、所謂病氣がさせる故でもあらうが、彼は斯うした場合冷靜に前後を考へて徐に話すことは出来なかつた、淺黒い顔、いや血の氣の少い黒すんだ顔を蒼白にして、稍震ひを帯びた聲で蘭子に迫つた、

『何程冷たい貴嬢でも眞逆忘れたとは云へますまい、二人が那の十六夜の月に乗じて、太秦から嵯峨野、下嵯峨から桂川の岸をつたうて、渡月橋へぶら／＼歩いた時の事を』

『其様な事今云はなくつたツて可いわ』

蘭子は何うぞして這の談をやめさせたいと思つた。

『いや、其時の事を云はなきや分らないんです、二人は肩を并べて渡月橋を渡りました、天には丸い月が鏡のやうに冴えてゐました、その光が大堰川の淺瀬に碎けて、嵐山は水煙に霞んで、その景色といつたらありませんでした、三軒家の二階から爪弾らしい三味の音が聞えてゐました、其時僕と貴嬢は橋の中ほどで欄干に凭れて月を仰いでゐたではありませんか。あゝ好い月だこと、何だか別の世界にでも來たやうな氣がしますわツて、貴嬢は悲しさうな眼をして凝乎と月を仰いだでせう』

『分つて、よ里村さん、早く行きませうよ、何時まで恁麼とここで其様なこと云つてたて詰らないんですもの』と、蘭子は其談を打消さうとして足摺した。

『行きますよ、今、其處で僕も貴嬢と同じやうに月を見ましたが、何だか斯う謂ふに謂はれぬ一種の悲哀を感じて來たので、あゝ僕は此月に對して感慨に堪へない、

俄にこの世界が厭になつたやうな気がして、出来る事なら此儘死んで了ひたい。と思はず云つたのです、すると貴嬢が透さず。貴方が死だら妾だつて生ちやゐないわ。と密と僕の顔を覗き込みなすつた、僕は其一言が嬉しくつて、我知らず貴嬢の手をシカと握つて。蘭子さん、それは眞實のお言葉ですか、實際貴嬢は僕のために爾う思つてゐてくれるんですか。と云ふと、貴嬢は無言で頷いて僕の手にホロリと一雫の露を落したでせう。あゝ最う云ひますまい、彼の時の事を思ふと僕は、僕は」

里村青年は手巾で顔を拭いてゐたが、

「其時始めて互ひの心を打明け合うて、近き將來は二人同棲して楽しい家庭をつくりませうと約束したではないですか、僕は爾來その約束を守つて、何處までも僕の未來の妻は貴嬢であると楽しんでゐました」

蘭子は恁麼とところで恁麼ことを聴くのは實に辛いと思つたけれども、其場を逃出すといふ譯にもゆかゆので、じつと辛抱して聴いてゐた。

里村青年は愈々興奮した聲で、

「それが何うでせう、今年の春、貴嬢が學校を卒業なさると同時に、貴嬢の態度は忽ち一變して、何だか斯う僕を敬遠するんです、最う前のやうに手を捉つて散歩するといふ事も成るべく避けるやうになさるし、僕は實に貴嬢の不明瞭な態度が情けなかつたです、爾うしてさんく僕を煩悶さし懊惱さした結果が、何うです、無斷で今度の上京でせう、蘭子さん、少しは僕の心にも成つて見て下さい」

蘭子は返答しなかつた、何程其心に成れと言つたつて、去年の蘭子と今年の蘭子は同じ蘭子でも蘭子が異つてゐた、今の蘭子には何としても里村青年の心に成る事は出来なかつた、希望に輝く未來を持つた蘭子、聽ては有らゆる富と權勢を我物とせう望みの蘭子には、里村青年などは餘りに小さく物足らないのだ、男らしくもなく恁麼ことを繰返し繰返して聴かされるのが笑止にもあり腹立たしくもあつた。

人を恁麼寂しいところへ連込んで、何時まで斯うした面白くもない事を繰返してゐるのだらうと、蘭子は可笑しくもあり、腹も立つたが、眞逆に里村青年を此處へ置去りに自分一人歸つて了ふ事も出来ないで、俄に笑顔をつくつて心にもない事を云つて慰め始めた、

「ほ、ほ、貴方何うかしたのね、何だつて其様な事を仰しやるの、妾だつて那の時の事は能く覚えてよ」

「本統ですか、事實ですか、蘭子さん」

と里村はバネ仕掛の玩弄品の兎のやうに飛上つた、

「事實貴嬢が那の時の事を覚えてゐるなら、今度のやうに無斷で出京なさるといふやうな、其様な冷淡な事は出来ない譯だが……」

「疑ひ深い人」と蘭子は態と嘲笑つて、
「妾は爾う思つてたわ、妾が心で思つてるやうに、貴方が那の時の約束に重きを措てらつしたら、必と跡から出ていらつしやるだらうと信じてゐたわ、だから妾、昨日新橋で貴方に逢つた時、果して妾の思ふ通りだと思つて、非常に心丈夫に思つたのよ」

蘭子は自分でも何うして恁麼ことが云へたらうと思つた、

「だから其様なことは問題にならないことよ、ほ、ほ、さあ早く行きませう、妾早く浅草が見たいんですもの」と里村青年の手をとるやうにして歩き出した、折好く其處へ美術學校の學生らしいのが四五人連立つて来て、行違ひざまに、二人をシロシロ見て行つたので、里村は最う其事に就ては重ねて追窮する機會を失つて了つた。聽て二人は公園を出て浅草行の電車に乗つた、電車の中は一杯の人で、大勢吊皮にぶら下つてゐた、蘭子も人のするやうに吊皮につかまつて身を泳がしてゐると、つ

い其側にかけてゐた角帽の學生が、ツと身を起して、

「お掛なさい」と席を譲つて呉れた、里村青年は其れを見て不愉快な顔をした、而して蘭子に代つて吊皮にぶら下つてゐる角帽と蘭子とを疑ひ深い眼でチラ／＼窺み見た、それが又蘭子に一つの不愉快を與へた。

仲見世を歩く時、蘭子は自分の服装や容姿が、此處で見る東京人とさして異りのないのを誇らしく思つたが、何となく風采の揚らぬ里村青年と連立つて行くのが氣耻かしくてならなかつた。

観音堂の横から噴水の前へ出て、公園を一周し了つた時、

「蘭子さん貴嬢腹は何うです、最う十二時でせう、何か食ひませうか」と上野から此處へ来るまで、一生懸命何か考へ込んでゐて神経的な顔をして無言であつた里村は、始めて蘭子に話し掛けた、

「爾うねえ、妾何うでも可いけれど、貴方は？」

「僕ですか、僕は何だか胸がつかへてゐますが、貴嬢腹が減つたでせう」

「ほ／＼、妾何ともないわ、貴方何も食ひたくなけりやよ／＼ませう、何だか極りが悪いから」

「それも爾うです」

「それよりも三越へ行つて見なくつて」

「お望みなら行きませう」

「此處から遠いの」

「電車に乗れば直ですが……」

這麼ことを話しながら、何時の間にかやら仁王門へ出て又仲見世通りへ逆戻りした。

(1111)

朝夕は秋風肌に涼しくても、日中は尙九十度近い残暑の苦熱が人を苛んだ。

其烈しい正午の日光を洋傘でよけて一、面に水を灌つた仲見世通の石畳の上を蘭子は千代田草履の足元を爪立てるやうにして歩いてゐた、成るべく里村青年と肩を並べぬやうに、暑いといふのを口實に後になり先になりした。而して化粧品屋やら、玩弄品屋やら、名物紅梅焼だの何だのといふ兩側の店頭を飽かず見て歩きながら、この長い仲見世通と京都の新京極の通りと何方が長いだらうなど、罪もない事を考へてゐた、萬づに執着のない蘭子の心には、先刻上野であつた事などは最う全然忘れてゐた。

けれども一方の里村青年は其事が容易に念頭を去らないと見えて、眉と眉との間に深い皺を刻んで、伏眼勝に考へ／＼歩いてゐた。

廣小路へ出て大門行の電車に乗らうとした時、

「貴女久米さんぢやなくつて？」

突然聲を掛けたものがあつたので、蘭子は驚いて停立つた、

「まあ！ 伊東さんでしたの、お珍らしい」と、蘭子は笑顔をつくつて丁寧に低頭をした。

伊東と呼ばれたのは、蘭子と同じ年頃の女學生で、おそろしく庇を突出した髪に金蒔繪の櫛をさして、袖の長い紋上布の單衣に葡萄色の袴を穿いてゐた、蘭子とは京都の高等女學校での同窓で、可なり親密な交際をした仲であつたが、何ういふ譯か、伊東は二年生の時退學して出京したまゝ、其後絶えて消息がなかつたのである。

伊東は比較的粗畧な挨拶をして、

「本統にお珍らしいわねえ、貴女何時此地へ來らしたの、此處で久米さんに逢はうなんて實に意外だよ」と、少し離れて呆然立つてる里村の方をチラリと視た。

「昨日來ましたの」

「昨日來たばかりぢや、未だ湯氣が立つてるわねえ、お宿は何處、御親戚、下宿？」

「いえ懇意な宅ですの、小石川白山御殿町百二十五番地の堀川ッていふ家に居りま

すの、妾も改めて御伺ひはしますが、貴女も是非一度いらつしやいな、狹い汚いところですね」と

「え、伺つてよ、三年振りで久米さんに邂逅たんですもの、積る談が種々あるわ、しかし貴女は是から何處へ行らつしやるの、何か急な御用があつて？それとも見物？彼の方御同伴？」

蘭子はハツと思つて里村の方を振り返つたが、幸ひ里村は彼方を向いて何か見てゐたので、

「いゝえ、那麼人同伴ぢやないわ」と、我知らず偽つて了つた。

「爾う、妾また御同伴かと思つてよ、ぢや丁度好いわ、妾是れから此先の國華座ツていふ劇場へ行くとところなのよ、貴方構はなきや一緒に行かなくつて？ 京都の歌舞伎座や南座には追付かないけれど、それでも可なり見られてよ、二三人の友人が先へ行つてゐて、ちやんと場所が取つてあるんだから、妾久し振りで御案内するわ、而

して友人にも紹介しますから、何う？ 久米さん、おいや？」
蘭子は殆んど當惑せずにはゐられなかつた。

(一四)

「は、難有う、しかし妾今日は失禮します」と、蘭子は苦しい辭退をした、

「何故？ 可いちやありませんか、三年振りの親友が圖らず此處で邂逅したんですもの、此儘別れて了ふのは實に残念だわよ、そりや明日といふ日も明後日といふ日もあるけれど、此處で逢つたのは全く好い機會だわ、恁麼機會を利用しなくつちや、再び御一緒に芝居なんか見られるか何うだか、ね、ですから是非いらつしやいな、今日は別に用はないんでせう、爾うだわ、屹と淺草見物にいらつしたんだわ、妾知つてゐてよ、ね、御迷惑でせうが是非、伊東咲子が舊友久米蘭子さんに痛切にお勧めしてよ」

聞いてゐてさへ何だか齒の浮きさうな聲や身振りで、什麼も勧め上手に勧めて已まぬ、

「御親切は何ですけれど、實際妾他に少し用が……」

「用つて何？ 嘘を仰しやい、用なんか有るもんですか、さあ〜何でも可いから妾に任せて來らつしやい〜」

咲子は自分一人合點してそら〜先に立て、電車路を横切つて並木通の方へ歩き出した、

「では甚だ失禮ですけれど妾は是で」と蘭子は其儘別れやうとしたが、咲子の方は故意があつてか自然にか、是非々々といふのを幾度も繰返して容易に承知しないのみか、近來の京都は知らないが、東京の女學生間では爾うした不坦白な交際振りは流行らないの何のと、果は他を田舎者視した嘲るやうな口調で、往來の男女が見て行くのも一切お構ひなしに、無理無態に蘭子の手を捉つて引立てた。

其體を先刻から遙に見てゐた里村は、何と思ふたのか稻妻のやうに軌道を横切り蘭子に近付いて、

「蘭子さん、遅くなりませう、早く行きませう」と、聲を掛けた。

蘭子はしまつたと思つたが、今は最う何うする事も出来ないで、思はず知らず顔に紅を散して俯伏した。

「おほ、おほ、そうら御覽なさい、妾の推測通り貴方がたは同伴だつたんでせう、久米さんも暫時逢はない間に中々人が悪くなつてよ、覺えてらつしやい」と、咲子は勝利の誇りを色に見せて、大勢の人中をも構はず、力に任して蘭子の脊をヒシヤリと叩いた、蘭子は實際此邊に穴があれば入りたいと思つた。

咲子は叩いた其手を蘭子の肩にのせたまゝ、
「何うです久米さん、妾の眼は高いでせう、先刻から妾チャンと知てたの、其れを貴女が眞面目になつてお隠しなさるから可笑しかつたわ、しかし丁度好いことよ、

實は妾の方にも一人男子の同伴があるの、ほ、ほ、ほ、だから御一緒に來らつしやいな」と、其眼を直ぐ里村の方に轉じて、いかにも意味のある眼光をして見せた。「ねえ貴方、可いでせう、妾と久米さんは三年前の親友ですもの、斯うして偶然逢つて見ると此儘別れて了ふのが残念でならないんですもの、ですから妾の行く所へお伴したいのですよ、貴方も是非御一緒に來らして下さいね、好いでせう、ね貴方」と、巧みな辯舌や身振り手振りはトウ／＼里村までも味方にして了つた。

(一五)

さて斯うなると蘭子は存外意氣地はなかつた、未來は交際社會の女王に成らうといふ大した理想を持つてる身で、高が舊友の伊東咲子位に難なく掌中に載せられて了つて、彼の女の命令に背くことが出来なかつた、弱くも自分の意志を貫くことは出来なないで、おめ／＼として咲子の謂ふが儘に従ふのであつた。

咲子は勝ち誇つた元氣で、前よりも一層はしやいだ聲で途中いろ／＼の事を話した、而して自分等二人よりは少し遅れて後方からコツ／＼歩いて來る里村青年の方を鳥渡振返つて、

「しかし彼の方貴女の何？」

「何つて？」

「おほ、御親友、従兄、それとも兄様、ほ、ほ、」

「嫌な伊東さん、其様なこと聞いて何うなさるの？」と蘭子は赤い顔をした。

「何うするって、其れを豫め確めて置かないと是れから先の交際に差支へることよ、親類なら親類、普通の友人なら友人、若し久米さんの愛郎なら愛郎のやう、其れ相當の禮儀を盡さなきやならないでせう」

咲子は冗談半分に謂つたのであるが、蘭子は非常な侮辱を受けたやうに思つた、那の風采の揚らない里村青年を、親類だの従兄だの愛郎だのと云はれるのが、甚しく

自分の權威を傷つけられたやうに思つて口惜しくてならなかつた、恁處とところで恁麼人に逢ふことが分つてゐたら、里村青年などに案内を頼んで來るではなかつたと後悔の念が頻りに胸を騒がしたので、親類でも從兄でも何でもないが、同じ村から出京してゐる青年なので、先方から望んで好意上見物の案内をして呉れたのであるといふ事を、什麼も眞面目に熱心に辯解した。

咲子はその眞面目腐つて辯解振りが可笑しいと云つて散々笑つた。

座附の茶屋から案内しられて、むつと人いきりのする劇場内へ入つた時には、舞臺では今序幕の中程を演じてゐる最中で、それが舊劇の中でも大甘物の槍の權三といふ狂言であるといふのが、平素から觀劇好の蘭子には直ぐ分つた。

歌舞伎や明治の立派であるといふ事、帝國劇場の何處までもハイカラであるといふ事などを、新聞で讀んだり人から聞いたりしてゐた蘭子は、この國華座の設備や狹いのに驚いた、是れなら京都の劇場の方が遙に立派であるとジロ／＼場内を見廻し

た。

咲子は素早く其心を釋んだらしく、

「ほゝ、久米さん何う？ 甚麼感じがして、京都の芝居の方が好いでせう、しかし

此處は東京の芝居でも中どころだから斯うなの、今に歌舞伎や帝劇へ行くと東京の眞價が分つてよ」と呟やいた。

やがて三人は東の棧敷へ入つた、其處にはおそろしくハイカラの服装をした二人の女學生と、若い一人の學生がゐた。

「伊東さん何うなすつたの、遅かつたわねえ」

「途中で那の方に逢つたのでせう、ほゝほゝ」と、一齊に下素張つた聲で揶揄つた、それを咲子は叱るやうに睨んで、

「へん貴女方とは違つてよ、妾途中で舊友に逢つたの、それで否だと仰しやるのを無理からお連れ申したの、只今御紹介してよ」と、咲子は遽に反身になつて蘭子と

里村を三人に紹介した。

(一六)

二人の女學生は何れも咲子と同じ私立女子美術學校の生徒で、色の青白い肺病患者のやうに瘡せたのが内村久子、其れと反對に色は白いが葉迦に肥満して、坐つた膝が小山の様に盛上つてゐるのが羽田時子といふので、二人共咲子とは姉妹同様に仲好くしてゐる間であるといふ事を、蘭子は咲子の爽やかな辯舌で紹介せられた、而して「此方は帝大文科の澤藤進さんと仰しやる方で、矢張り妾の親友」と咲子が云つた時、蘭子はこの青年が先刻上野で電車に乗つた時席を譲つて呉れた大學生であると直ぐ知つた、けれども斯うした場合、咲子を初め久子時子の手前其時の禮を云つて善いか悪いか思ひ惑つて態と黙つてゐた。進の方では其様な事には一向無頓着で、

情 愛

「お、貴嬢でしたね、先刻電車の上でお目にかゝつたのは」と、什麼も物なれた會釋をした。

先方から斯う先を越されて見ると、蘭子も其時の禮を云はずにはゐられぬので、思はず頬の熱るのを覺えながら人々の前をかねながら禮を云つた。

「おや、呆れるわねえ、お二人共先刻御承知なんだもの、其様なんなら別に御紹介する必要もなかつたのに」と、咲子は態とらしくツンとした容子をして見せた。「ほ、そりや澤藤さんですもの、其處邊らに萬々御如才はないことよ、ねえ、内村さん」

情 愛

「爾うですとも、イヒカン、アングスタンド」と、時子は蒼白い尖つた顔を突出してニツと笑つた、而してチラリと蘭子を見た眼には、何うです貴女にや英語は解つても獨逸語は分りますまいと云つたやうな光が閃いた。すると澤藤が透さず、

「何ですイチバン、アンタスカン？ は、は、は、何うせ吾輩は貴女方に好かれる柄ぢやないんだ」と混ツ返した。

「それよりもイチビン、アンタ明けたら何うです」と、其處に置いてあつた麥酒の瓶を指さした、

「驚くわねえ、二つ目には此通り飲みたい食べたいんだから、平民の子は是れだから可けないことよ」と、咲子は一かど巧みな洒落でも云つた積りで、得々として麥酒の栓を抜いた。

舞臺ではチョンと木が入つて幕がしまつた、今まで舞臺にばかり氣を取られてゐた土間や棧敷の看客が、四邊憚らぬ此の騒ぎに、呆れた顔をしてシロ／＼此方を見た、其れでも三人は姫御前のあられもなく、むしやく／＼食べたりベチャ／＼喋つたり、押す突く笑ふ怒る、傍若無人に思ふさまキヤツキヤと騒いだ、蘭子は何といふ淺ましさだらうと思つて、大勢の視線が自分の上にまで及ぶのが耻かしくて堪らなかつた、

流石に如才のなさうな澤藤進は、蘭子の迷惑してるのを察して、

「おい／＼少し静かに仕たまへ、第一お客様に失禮ぢやないか、ねえ久米さん、京都にや斯う云つた人物はありますまいね、は、は、は、は、は、は、と、取なし笑ひをした。里村は先刻から苦い顔をして頻りと煙草ばかり吹かしてゐた。

(一七)

秋！ あ、秋！ 秋といふものは不思議に何が悲しいといふことはなく人に一種の悲哀を感じさせる、其れが何となく歡樂の後から生ずる淡い悲哀のやうで、その心持が何ういふ心持であるかは口へ出しては謂ふ事が出来ない。

蘭子は開放つた半窓の闕に片腕を凭せて、白山神社の森を見ながら恁麼ことを考へてゐた、淡い瑠璃色の空は透明るやうで、白い雲がところ／＼に浮いてゐた、こんもりと茂つて小山のやうに盛上つてる森の樹が時々軽い風に戦いだ、而して其中か

らであらう、ゼゼゼゼと急しない蟬の聲が聞えた。

蘭子は昨日圖らずも途中で舊友の伊東咲子に遇つて、無理強ひに強ひられて國華座を見物して夜遅く歸つたのと、一昨日の汽車の疲勞とが一緒になつたのであらう、何となく頭が重くて氣が塞いだ、恁麼時には其處の白山神社の境内でも散歩して冷たい空気を吸うて見やうかとも思つたが、それも思ふたばかりで身體を動かす氣は起らなかつた、唯もう何時までもじつと斯うして居たいやうな氣がして頬杖をついたまゝ、間斷なく後から後からと續く蟬の聲を聞きながら、昨日劇場で初めて逢つた咲子の友人の驚くばかりに不仕鱈であつたことや、大學生澤藤進の如才ない交際振りなどを其れから其れへと思ひ出してゐた、四面が山で、空氣が重く沈んで、人の氣が陰鬱で、女性的男性の多い京都に生れて親の手元を離れて旅行したことは、學校の修學旅行の時奈良と大津と大阪へ行つたばかりであるといふ比較的世間見ずの身には、那麼した澤藤のやうな快活で如才のない青年に接したことは曾てないので、

蘭子は思ひ出してさへ一種の快感を覺えた、其れに較べると里村健三の京都的性格が愈々厭はしく成つて來て、是れから先は出来るだけ彼には遠ざからうなど思つた。澄切つた空氣の中を漂つて、ド、ンと正午の號砲が聞えたと思ふと、

「久米さん、御飯ですよ、失禮ですが降りて來て下さいね」と、階下から細君の何程か東北音を含んだ聲がした、細君と差向ひになつて膳に向つたが、風邪でも冒いた時のやうに食事は不味かつた。

談話好きの細君は食事中いろいろの話をした、昨日蘭子が見て來た國華座は安芝居ではあるが何時でも中々勉強してゐて面白いの、自分は昔者の故か帝國劇場などより却つて彼の方が見て面白いのだ、しかし帝國劇場はおそろしく立派で、鳥渡場内へ入つて見たばかりでも田舎者は荒膽をひしがれて了ふのと話した、而して近々には是非二人で歌舞伎座へ行つて見やうと云つた。

細君は四十の坂を随分越しながら中々のめかしやで、嘸髮結泣かせだらうと思はれ

る毛の薄い頭を丁寧にときつけて、小さな形の丸鬚に結つてゐた、話しをする度にチヨボ口をして可笑しくもないのに笑つて見せるのが癖であつた、一つ喋り出したが最後何時果てるとも分らぬまでに續けられるのには、蘭子も少々弱らされた。

「御免下さい」

カラリと玄關の格子戸を開ける音と共に案内を請ふ聲がした、

「おや何方か入らしたやうだ」と細君は尻輕に立上つた、間もなく玄關で、

「あのお宅に久米蘭子さんといふ方がおいでゝすか」といふ若い男の聲が蘭子の耳に聞覚えがあつた。

「おや」と思つて蘭子は我知らず胸を躍らした。

(一八)

蘭子の胸を騒がした訪問客は思ひもよらぬ昨日の澤藤進であつた、彼は昨日と同じ

大學の制服を着て悠然と二階の六疊へ通つた、今日は始めて訪問した家だと思つて慎んでゐるのか、昨日のやうな飄輕なところは少しもなく、どつしりと沈着を見せてゐるので男振までが一段と上つて見られた、けれども爽やかな辯舌と快潤な顔の色は異らなかつた。

「や、最う構はずに措いて下さい、直ぐお暇するですから」と進はニコ／＼しながら蘭子の手づから團扇を進めたり茶を入れたりするのを押し止めた、

「未だ御交際の薄いのに恁麼に押掛けて來ては餘り失禮だとは思つたですが、昨日は始めてお目に蒐つて置いて那麼にさん／＼な失禮を働いたので、實はそのお詫に伺つたです、は、は、」

「まあお詫なんて、妾こそいろいろ失禮致しましたのに、は、は、」

「何うして、君が失禮なものですか、我々ときたら實に言語道斷お話しになりません、何うでした那の醜態は、伊東さんは其れでも君が居られたので少しは慎んで

「おられたやうですが、他の二人と来たら怪しかるもんです、私も幾度腋の下から冷汗を出したか知れませんが、ははは君は驚かれたでせう」

「其様な事はございませんわ、しかし面白い方だと思ひました」

「面白いにも何も論外だ、四邊構はず愚にもつかぬ洒落は云ふ、無遠慮に人は攻撃する、あれでは芝居を見に行つたのか騒ぎに行つたのか更に分らんです、全體東京の女學生は男子を男子とも思つてゐなければ、人を人臭いとも思つてゐませんからね、ははは」

「ははははは」

「しかしアレで那の二人は學校では中々出来るんですからねえ」

「おや爾うでございませうか」

「二人共同級ですが、あの蒼い顔をした内村の方は一番で、肥満つた方の羽田が二番で、何時でも此の二人が級中で首座を占めてるといふ事です」

「伊東さんは？」

「彼の人は彼等より一年以上ですが、成績の點は餘り聞きません」

進は何ういふ譯か咲子の上に就いては餘り批評を好まぬらしかつた、蘭子は早くも其意味を覺つた、元來咲子は京都に居た時から餘り出来る方ではなかつた、何時も級の中位以下であつた、それから推測すると、東京へ來ても矢張り其れであるので、進は態と其話は避けてゐるのであらうと、蘭子は人の非を擧げるを好まぬ進の人格を懐かしく思つた。

進は更に二人の上に就て、話を進めた、

「詰り人間が洒落に出来るから那麼なのでせうね、羽田の方は那の通り太つてゐるだけ無神経で物に無頓着なのでせう、一方の内村さんは非常な神経質ではあるが、總てに神経を費すといふ事が、大に自己の健康を害するといふ事を自覺して、殊更に快潤にしてゐるらしいです、而して二人共故郷の家が非常な金満家だもんですから、

勝手氣儘な贅澤をしてるんです、兎に角面白い人物には相違ありませんが、少々無頓着過ぎるので初対面の人は驚くです、はゝゝゝ』

進は心地好げに笑つて、

「しかし、君が今後御交際なすつても決して悪い側の友人ではありませんまい、内村さんは青森縣の多額納税者の令嬢だし、羽田さんは秋田縣で是れも屈指の商家ださうです」

(一九)

進は未だ二十五六の青年ではあるが、斯うして座談の巧いことや、重々しくもなく軽々しくもない態度の什麼も紳士的であるのと、他の感情に觸れるやうな談は何處までも避けて、相手に快感を起させやうと勉める點などが、學生らしくなく飽まで世故に長けてゐた、その巧い調子に蘭子は不知不識チャームしられて、是れと云つ

て取り止めたところもない世間話を飽かず何時までも聽いてゐた。

それから又蘭子は進の談で伊東咲子の近状も詳にすることが出来た、咲子の父は曾て京都府廳から内務省へ轉任したが、間もなく北海道廳へ再轉任といふ事になつたので、咲子だけは學校を卒業するまで東京に残つて、本郷の知人の家から通學してゐるといふ事であつた。

徐に團扇を使ひつゝ進は恁麼事を話した上、

「失敬ですが、君は今度何處の學校へ入られるのですか」と訊ねた。

蘭子は堂々たる大學生の前で、臆面もなく自己の目的を話すのは何となく極りの悪いやうな氣もしたけれど、訊ねられて強て隠すほどの事でもないもので、いや隠すところではない、蘭子は心の裡で進を何となく頼母しい青年だと思つてゐたので、訊ねられたのを幸ひに、相談らしく思ふところを話した、

「え、女子大學へ入らうと思つて參つたのですけれど、何だか種々な批評もあるや

うですから、寧ろ女子美術の方にしやうかとも思つて居りますので」

「なる程、それは何方でも可いでせう、しかし君の前途の目的が美術を以て世に立たうといふのなら無論其方ですが、學問をもつてといふ事なら目白の方だつて差支へはありますまい」と進の返答は要領を得たやうで得てゐなかつた、人の言葉に逆らはぬといふのか、人を反らさぬといふのか、態度は頗る曖昧であつた、

「けれど大學の方は何だか生意氣だつて伊東さんも云ひますから、ほゝゝ」

「伊東さんが其様な事を云ひましたか、ほゝゝ、そりや必と君を自分の畑へ引込まうと思つてたんでせう」

「ですから妾美術の方へ行かうかと思つてますの、何うでせう？」

「宜しいでせう、舊友の伊東さんも居る事だし、萬事に好都合でせう、君何ですか繪畫がお好きですか」

「えゝ、故郷に居ります時少し日本畫の方を習ひましたので」

「爾うですか、僕も繪は好きです、だから類は友を呼ぶで、何時か伊東さんなんかと友人に成つたのです」と笑つた。

蘭子は何ういふ機會から此の人が咲子と親しく成つたのか、芝居を一緒に見たり互ひに冗談を云ひ合つたりするまでに親しんでゐる、其れまでの徑路が知りたかつた、若しや二人の間は、曾て自分が故郷で里村健三と交つたソレのやうではなからうかと思ふと、遽に黒い雲が目先に立覆ふたやうな氣がした。

一時間餘り話してから、

「や、初めて来て頓だ長座をします、失敬します」と進は傍の角帽を手にした、

「あら貴方未だおよろしいぢやありませんか」

「いや爾うもしてゐられません、何れ其中に又お邪魔するです、今日は昨日のお詫びに來たのです、はゝゝ、しかし僕の下宿は本郷森川町一番地の彌生館といふのですから、お通り掛けに寄つて下さい、失敬」

軽く一禮してすつと立上つた制服姿の態度が、あの力抜のしたやうな里村健三とは雲泥の相違だと蘭子は思った。

(110)

澤藤進が歸ると間もなく里村健三がぶらりと來た、昨夜更かした爲か、其れとも他に原因があるのか病人のやうな蒼い顔をしてゐた。

「昨日は難有う、おかげで東京見物をしました」

蘭子は里村の顔を見ると直ぐ斯う云つたが、彼は苦笑を洩らして、

「僕こそ、貴嬢のおかげで面白い芝居を見せて貰ひました」と冷たい眼光をして蘭子を見た。

蘭子は左ほど氣にもとめず、今進に出した菓子鉢を押進めて、

「何うです、一つお摘みなさいね」

愛 情

「菓子ですか、難有う、誰か來てゐたんですか」

「え、昨日芝居で逢つた大學生の方、何とか云ひましたねえ、澤藤さん、彼の方が見えましたの、貴方今途中で逢はなかつて？」

「逢つたやうでもありません、何だか角帽を被つた奴が僕を見て行つたやうだつたが、僕は氣にもとめなかつたんです」

「ちや逢つてゐて双方で挨拶もしなかつたの？」

「まあ其様なもんです、彼様な奴に別に挨拶する必要もないから、は、」

「まあ！ 冷淡ねえ貴方は、詰り昨日は妾達が彼の方等に招待を受けたも同然ぢやなくつて？ それに途中で逢つて口も利かないなんて、酷いわ」

「何が酷いもんですか、一體何をしに來たのです」

「此處へですか」

「爾うです」

「昨日餘り一同で失禮したからお詫に來たつて、本統に交際の巧い方よ」
 蘭子は別に里村に當て、云つた積りではなかつたが、里村はさつと顔色を變へた。
 「爾うですか、そりや僕等とは大分異つてるでせう、角帽といふ裝飾物もあります
 からね」と、凝乎と菓子器に眸を呉れたけれども、平素のやうに其れを摘んで見や
 うとは仕なかつた。

蘭子は昨日から里村に對する自分の態度が變つてゐるので、氣の小さい里村は何處
 までも其事が解決したので來たのであるとは覺つたが、恁麼ことを云ふ里村の心
 事が哀れにもあり、癢にも觸つたので、日頃から勝氣な彼女は一矢酬いずにはゐら
 れなかつた。

「しかし里村さん、貴方今日は何か御用があつて？」

「用がなけりや僕は此處へ來る事は出來ないのでですか」

里村の聲は顫へてゐた。

「ほゝゝ又あんなこと、貴方本統に何うかしてゝよ、東京へ來てから」
 蘭子は笑ひながら菓子器に盛つたカステラを割つて喰べた。

「いかにも何うかしてます、實は僕貴嬢にお暇乞ひに來たのです、僕は今夜の汽車
 で斷然京都へ歸らうと思ふので……」

里村の眼には涙のやうなものが見えた、

「まあ何故なの、一昨日來て最う歸るなんて、本統に貴方何うかしてゝよ」

「僕は何だか最う希望といふものが無くなつたやうな氣がするですから、此處で懊
 惱してるよりも寧ろ引返して、田舎で百姓の眞似でもする方が可からうと思つて」

「爾う、そりや其方が貴方の健康のためには好いかも知れないわ」

「ナ何です？」

里村は一膝刻んで屹と蘭子を瞻入つた。

午後六時に近い日光が窓の外の瓦を焼いて、白山神社では蟬時雨が頻りであつた。

今夜の汽車で歸ると云つたら、蘭子が驚いて止めるだらうと思つた目的は外れて了つて、蘭子の挨拶は何處までも冷々として水の如くに聞えたので、里村健三は我知らず膝を進めて蘭子を睨んだ、

「蘭子さん、貴方は僕が今夜歸ることに就て甚麽感想が起りますか？」

「ほゝ、甚麽感想つて、其様なむつかしい事妾知らないわ、折角来たんだから歸らないでおゐるの方が可からうとは思ふけれど、歸りたいと仰しやるんですもの、他の意志を左右することは出来ないからお止めしないのよ」

「人の意志、人の意志！」

里村は獨語のやうに云つて、怨みを含んだ眼で蘭子を瞻た、而して又獨語のやうに、「爾うでせう、何うせ爾うでせう、貴嬢は僕のやうな者が斯うして時々やつて来る

よりも、疾く貴嬢の前から去つて何處かへ行つて了ふのが望みなんぞでせう、而して那麼輕薄らしい賈大學生や御轉婆共と一緒になつて芝居を見たり巫山戯散らしたり仕たいのでせう」と云つた、聲は小さかつたが非常に激しているのは稍血走つた眼の色が證明してゐた。

「では蘭子さん、僕は最う是れでお目に菟りません、失敬します」と、里村は念を押すやうに重ねて云つた、斯う云つたら今度は蘭子が何といふであらうと相手の舉動を探る様にも見えた。

まあ何といふ男らしくない嫌味たらしい言葉や舉動であらう、何うして京都の男子は恁麼に女々しいのであらう、男らしい快濶な處は爪の垢ほどもなくて、年中重箱の隅を楊子の尖でせつてるやうで、萬事に故世ついてゐて執念深い、摺鉢の底のやうな小天地に棲で低い平凡な山ばかり見てゐるので那麼に成るのであらうかと、蘭子は自分が京都人であるといふのも忘れて頻りに京都の男子を呪ふた。

實際里村が想ふやうに、蘭子の頭には最う里村などは微塵もなかつた、月の渡月橋、そんな追憶はその月の雫ほども残つてゐなかつた、彼の頭は未來の榮華、何うすれば上流婦人として世に立つ事が出来るかといふ問題のみであつた、何で小心者の里村などが眼中にあらう。

「爾う、全くお歸省なさるの、妾新橋までお送りする筈ですが、昨日から非常に疲れてますから失禮してよ」と、それでも残り惜しげに里村を瞻た。

「え、送つてなんかモ、貰はなくつてよろしい、何うせ僕は一人で来て一人で歸るんです、是れから先の長い光陰も一人で寂しく暮すのですから……」

一旦立上らうとして、立上りも得せず未だ何か云ひ度げに眼をまじくしてゐた。誰か階段を上る音がしたかと思ふと、忽ち細君の丸髷が下からぬーと現はれて、

「久米さん御客様ですよ、内村さんに羽田さん、其れから伊東さんと仰しやる方が三人、お通し申しませうか」

「爾う、難有う、何うか通して下さいね」

蘭子は急に元氣付いて其處邊らを取片付けた。

階下では伊東咲子等の細君に挨拶する賑はしい聲がして、間もなく階段を登つて来る登音が陰鬱な四邊の空氣を破つた、

「久米さん昨日は失禮」

「は、は、は、妻等の亂暴なのに驚いちやつたでせう」

「同じ驚くのなら驚き序にモツと驚かして進げやうともつて、三人揃つて推參仕つて候ふ、おほ、おほ」と、喋りくどやく上つて來た。

里村は何時の間にやら孤鼠々と歸つて了つた。

(111)

悄悄として堀川の家を出た里村健三は今にも泣出しさうな顔をしながら、烈しい殘

暑の日光を浴びながらトボく往來を歩いてゐた、電車道へは出て見たが電車に乗るでもなく、魂魄脱殻の人間のやうに、只ふわくと何處を的ともなく足に任せて歩いてゐるのだ、それでも一歩々々と刻む足は不思議に進んで俾や電車にも衝突せず、指ヶ谷町から初音町と次第に歩いて蟻の這ふやうに富坂下まで來たのであつた。

「おい待ち玉へ、おい〜」

後方から聲を掛け〜追付いて來たのは二十三四の色の淺黒い眼の鋭い青年で、麥稈帽を被つて鼠地の詰襟の脊廣服を着てゐた。

「里村ぢやないかい、全體貴様何時出て來たんだ、先刻から那麼に呼んでるのに聞えなかつたのかい、何うしたんだ、何だか蒼い顔をしてるせ」と青年は健三の顔を覗き込むやうにして並んで歩き出した、

「や、松本君か、失敬」

健三は始めて夢から覺めたやうに松本に挨拶はしたが、心では依然として心變りの

した蘭子の事ばかり考へてゐるのだ。

「珍らしいなア、約三年振りだせ、何時來たんだい、最う病氣は全然好いのか、此の間君の呉れた手紙にや恁麼に急に出て來るやうな事も書いてなかつたが」と松本は什麼も懐かしさうに訊ねた、

「急に思ひ立つて一昨日來たんだがね、最う歸らうかと思つてる」

「何だ、一昨日來て最う歸る、訝しいなア、貴様何うかしやしないか、何だか容子が變だぞ」

「爾うかね、變に見えるかね」

「見えるとも、頗る振はない心配さうな顔はしとるし、第一影が薄いや」

「爾うだらう、爾うだらう」

里村は獨りで領いて獨りで合點してゐた、

「訝しい、實に訝しい、然し何うだい里村、久振りだ、僕が奢るから其邊で一杯や

りながら大に語らうぢやないか、第一その不可思議千萬な貴様の近状も聞きたいし」

「爾うだなア……」

「は、否に呆然してゐやがる、何でも可いからマア来い」

健三は今の場合、友と酒を飲むなどの元氣は出なかつたが、強て其れを振切つて別れて了ふ程の勇氣はなかつた、いや、水に溺るゝものは藻にも絶るで、常から親しい此友の同情ある慰藉の言葉が聴きたいやうな氣もして、勧められる儘に眞砂町の通りへ出て、玉突と洋食とを兼業する△△亭といふのへ入つた。

「入らつしやい」

「二階は静かい？」と、松本は大きな聲で喚いた。

「おや入らつしやいまし、丁度今何方もおいでに成つてゐませんから」と、頭を麻髮に結つて眞白に顔を塗つた女の給仕が飛んで来て、二人を二階へ案内した。

「此處が可い、此處が可い」と、松本は往來に面した一番端の卓子を占領して、

「里村、貴様は確乎日本酒黨だつたね、俺はウィスキー派だが、今日は貴様につきあはう、日本酒と、それから何でも好いから美味さうな奴をドシ〜持つて来い」

「上中並とございますが？」と給仕は揉手をして含笑んだ、

「無論上等、吾々は中等や並等の人物ではない、は、は、は、は」と松本は快濶に笑つてボーイを追遣つた。

「好い鹽梅に静で可い、里村貴様何かあるんだらう、多年の親友だ、貴様に煩悶があれば俺も俱々に泣いて遣らう、全體何うしたんだい、構はなけりや話して見んかと、疑乎と瞶めた眼には同情の光が漂うてゐた。

(1111)

眞白な卓子の眞中に、萩だの桔梗だのいろ〜の秋の花を活けたのを健三は無意識に眺めながら、

「恁麼ことを君に話すのも面目ないが」と、一昨日蘭子の後を追うて出京した事から、昨日今日の事情を詳しく話した、

「僕は莫迦を見に遙々京都三界から出て来たんだ」と嘆息した。

女給仕は笑顔をつくり、パンとスープを運んで来て、

「一つお酌をさして戴きます」と日本酒の徳利を取上げた。

松本はジロリと睨むやうに見て、

「うむ酌いで貰はう、よし／＼其れで可い／＼、其處で吾輩は御覽の如き蠻カラで女は嫌ひだ、好いから彼方へ行つて、呉れ」

「おや／＼、お邪魔に成るんですね」

「大成りだ、は／＼は／＼」と松本は快潤に笑つて、大きな音を立て、スープを吸ふた、而して給仕の姿が彼方へ消えるのを俟つて、

「莫迦だなア貴様は」と先づ罵倒の聲を浴せ掛けた、

「その蘭子といふ女の事は豫て貴様の手紙で知つてゐるが、そりや貴様ダメだ、其様な女ア斷然捨て、了へ」

「僕もこの積りで、ゐるにはゐるんだが」と、健三はブツ／＼云ひながらパンをむしつてゐた、

「積りも積りでないも問題にならない、全體貴様は俺の學校でも秀才の方だつたぢやないかい、それが脚氣を患うて心臓を疾むと其様に女々しく成つて了ふものかね、所謂健全なる身體には健全なる思想が宿るといふんだから、其れぢや可けないぞ」

「うむ……」

「貴様の話すところでもつて見ると、その蘭子といふ女は非常な虚榮の勝つた女性だ、最う彼が東京へ出るといふ時に貴様なんかは眼中に無いんだ、此頃流行の女學生の理想といふ奴で、未來は全權大使の細君か大臣夫人を夢見てる奴なんだぞ、頓でもない大べらぼうだ、其様な婦人に戀々して大事の一生を誤つて何うするッ」

松本の聲には眞情が籠つてゐた、

「爾ういふ女性は何だ、幸ひに君のいふ月の渡月橋とかの約束通り貴様の希望を達するとしてからが、貴様の家庭は生涯幸福ぢやないぞ、貴様は彼の女の虚榮の爲に終生浮む瀬がないんだ」

「うむ」と健三は唸つて情けなく思つた。

「しかし貴様も欺かれて此儘引込むのも残念だらうから」

「全く其處なんだ……」

「一つ俺が復讐の方畧を授けて遣らう、何うだ里村、一番復讐して見る氣があるか」

「そりや無いこともないが……」

「有るなら彼を苦しめるのは何でもないので、貴様あれから故郷で勉強したか」

「うむ、やつたよ」

「爾うだらう、貴様の事だから大にやつたらう、其れなら丁度在學の年數に満ちて

るんだから、是れから又學校へ出て、來年の學年に卒業試験を受けろ、而して資格を作つて置いて高等文官の試験に出て見るんだ、可いかね、首尾好くその試験が通りや貴様は一躍して高等官といふ肩書が出来る、それから後の出世は腕次第、その肩書を得たゞけでも彼は必と今日の事を後悔するせ、貴様がこの月桂冠を戴く頃には、彼の女は無慘に墮落してゐる時だらうからね、振へ、大に振ふべし」

「はい」

給仕は呼ばれたと思つてスタ／＼と駈けて來た。

(二四)

大に飲んで大に語り、といふと彼一句は一語熾んに談が持てたやうだが其實健三は食ふばかりで十言に一言を返してゐて、松本ばかりが氣焔を揚げたのであつたが、

驥て勘定を拂つて表へ出た頃は、最う薄墨色に暮れて眞砂町の通りには電燈の光が家並に輝いてゐた。

友の心を引立たせやうといふ眞情から、自分先づ大に元氣を出し大に飲んだために松本は足元が少々危く見えるほど酔うてゐた、健三は元來が餘りいけぬ口なので、是は眼の下が多少色付いた位で眞面目だった。

松本は銀頭の太い洋杖を無闇と振廻しながら、例の聲音を帯びた聲で通行人の聴くのも構はず、幾度となく同じ事を繰返した。

「可いかね、大に元氣を振り起して大丈夫的精神を持つんだぞ、吾輩は嫌ひだ、女のやうにメソソ泣きたがるのは、失戀の悲哀だとか、何とかの憧憬とか、爾ういつた奴は大嫌ひだ、兒女の心を脱して大丈夫の意思を持つべしだ、可いかね釋つたかね」と、強く健三の肩を掴んで其顔を差覗くのだ。

健三は先刻から斯うした同じ意味を幾度か繰返されたので、あゝ蒼蠅といふ感じ

もしたが、是れほどまでに自分を思つて呉れる、松本の心が嬉しかった。

「うむ釋つたよ、君の意見に従ふよ」

「釋つたかい、釋つたら可いが、男兒的の行動を爲せよ、苟くも堂々たる男子が一婦人の尻を追うてメソソ泣くんぢやないぞ、耽溺だの、憧憬だのと云つて、今の青年は兎角詩人的半狂的行動を仕たがるから可けない、男兒須く拔山蓋世の偉業に志すべし、區々たる一婦人何ぞ論ずるに足らんツ」

餘り聲が大きかつたので、横丁からヒョッコリ出て來た老人が、出會頭にハツと肝を潰して一二間飛退いた。

「君、おい君、少し静肅にしたまへ、人が笑つてるぢやないか」と、健三は止めた、忠告しられてゐる人間が今度は忠告する番に廻つて來たのだから呵しい。

「ダ誰が笑つてる、構はん、笑ふ奴なんか何程でも笑はして置け、彼は彼たり我は我たりだ、何うだ釋つたか、其様な小ぼけな事に一々精神を勞するやうぢや逆も大

人物になれぬぞ、何でも可いから大人物になれ、その失戀とか憤恨とかいふ奴を利
用して、大奮發大努力しろよ、全體京都の奴は陰鬱で卑屈で可けない、京都的精神
を脱却して日本的活氣を持つんだぞ、可いか、は、は、は、まあ欺されたと思つて俺の
云ふ通りに見ろ、貴様は他日俺に感謝する時が来るんだ、なかに京都人だつて
奮發すりや偉くなれる、現に西園寺侯のやうな聰明な政治家も京都人だ、故岩倉公
も京都人だ、數へれば幾程も偉いがある、釋つたかい、頼むせ里村、俺ア酔つて
いふんぢやないぞ、確乎しろよ」

「釋つたよ、君の親切は謝するよ」

「む、釋つたら可い、全體此處は何處だい、電車が走つてるぢやないか」

「は、は、は、最う切通しへ來てるんだよ、湯島天神の横だよ」

「は、は、面白いな、ぢや上野へ行かう、月に乗じて公園を散歩せう」

「上野はいやだ、君の下宿は五軒町だと云つたぢやないか、下宿まで送らう」

健三は上野と聞いてさへ、昨日の事を思ひ出して不快でならなかつた。

(二二五)

健三は松本を五軒町の下宿の前まで送つて入れといふのを、強て辭退し、電車に乗
つて本郷の下宿へ歸つた時は彼是れ九時頃になつてゐた。

健三の下宿してゐる家は、大學の直ぐ前の所を細い小路へ入つたところで、橋本と
いふ軒燈の出た小さな二階家だ、此前一年半許りも此家に居た緣故で、今度も此家へ
落着いた譯であつたが、其頃親切に世話して呉れた内儀さんは姿が見えないで、若
い酌婦揚りらしい女が長火鉢に頑張つてゐた、何某生命保險の勧誘員を本業として
ゐる此家の主人が、何かの事情から妻を取換へたのであらうと思つたが、健三は主
人に逢つた時にも別に其事は訊かなかつたけれども、主人の方では極りが悪かつた
と見えて、

「私の許もハア何ですて、彼時から種々變遷がありましたな、先の山の神はおツ放り出して、今年の春から此女が来て萬事御客様の世話をやいて呉れますやうな事ですね、へへ」と辯解らしい問はず語りをした。

下宿の女房が換つてゐやうが居まいが、其様なことは健三には別に痛痒を感じる問題でないので、幸ひ此頃は下宿人も少い静かさを好都合として、其儘此家に根城を構へたのであつた。

カラリと格子を開けて土間へ入ると、此處から見える茶の間から例の若い内儀さんが、

「お歸りなさいまし」と聲を掛けて、

「里村さん先刻からお客様がお待ちでございますよ」とニヤ／＼笑つた。

「待つてるんですか、二階で？」

「えへ、ほへへ」

「甚麼人です」と、健三は一昨日來た儘の自分を何處の何者が訪ねて來たかと不思議でならなかつた。

「美しい方ですよ、ほへへ」

「婦人ですか」

「えへ、午後からお出掛けになつて未だお歸りになりませんと申しましたら、今夜お立に成る様子はなにかとお訊ねでしたから、いへ別に其様な御容子はありませんと申しますと、其れぢや應てお歸りだらうから少時待たして呉れと仰しやつてお待ちでございます」と、内儀さんは含笑んだ。

「む、蘭子が來たんだな」

健三は直ぐ氣が付いた、しかし今日那麼に冷淡であつた蘭子が何のために態々來たか、其れが一つの疑惑であつた。

健三はトン／＼と荒い足音を立て、二階へ上つた、而して取っ付きから二つ目の自

分の室の明り障子を手荒く開けた。

「お歸り、貴方何處へ往つて？ 今頃まで、ほゝゝ」

果して蘭子で、思ふさま色の配合に注意を拂つた服装や、房々としてつややかな髪飾りが他の心を時めかした。

「畜生！ また化しに來やがつたんだ狸め」

健三は心で叫んで、態と沈着な態度で机の前へ坐つた。

(二六)

畜生め、また化かしに來やがつたな！と心で叫んだことは叫んだけれども、花園第一の美人、いや日本一のこの東京へ來ても容易に肩を並べるものはない美人の蘭子が、今夜のやうに粧うて斯うしてゐる艶麗さを見ると、健三の心は次第に鈍つて、今日那麼冷たい心を見せながら、また態々此處へ訪ねて來る處を見ると、今までの

非を覺つて詫に來たのではあるまいかと思つた、いや何うぞ爾うであつて欲しいと希ふた。

けれども先刻松本から懇々忠告しられた節も頭腦に残つてゐるので、心では恚に思ひながら、表面では何處までも六ヶ敷い顔をして見せた、

「蘭子さんお待ち遠でした、何か用があつたのですか」と、片腕を机に凭せて蘭子を睨むやうに見下した、

「えゝ、妾先刻那處にお斷りして置いたけれど、其れでは餘り何だと思つて、新橋までお見送りせうと思つて來たのよ、ほゝほゝ」と蘭子は何處までも無邪氣な顔をして笑つてゐた、

「それから他に少し話して置きたいこともあつたので……、しかし貴方最う故郷へ歸らなくつて？ 今まで何處へ行つてらしたの？」

「今夜歸省の積りでしたが、急に模様換しました、その他の話といふのは何です」

「此處で云つても可いけれど、この隣室誰か居て？」と蘭子は躊躇した。

「何うですか、静だから居ないんでせうよ、何時でも居る時には何かゴトくやつて居て、中々恁麼に静かぢやない」

「ぢや居ないんでせうねえ」

折好く階下から小女が湯わかしを持つて來たので、

「おい金ちやん、隣室は誰か居るかね」

「いゝえ只今お留守ですよ」と、小女は薄笑ひをして降りて去つた。

「他に聞かれて悪いやうな談ですか」

「えゝ、爾うなの、ほゝゝ、あの嵐山の事ね」

「嵐山の？」

「渡月橋での事ねえ、昨日貴方が上野で仰しやつた」

「そ、其れが何うしたのです？」

健三の胸は騒いだ、尙ほ少しは酒氣の残つてゐる顔にさツと血の氣が走つた。

「貴方怒つちや厭よ、妾あの時のお約束取消して戴きたいの」

「解りました、そ、その約束を取消すために態々來たのですか」

健三は此に至つて絶望の深い／＼谷底へ突落されたやうな氣がした、

「あら爾うぢやないけれど、妾あの時は全く無考へで那麼こと云つて了つたの、けれど段々考へると、妾も貴方も前途が長いんです、那麼約束にかゝりあつてお互ひに其方ばかり考へてゐちや勉強も何も出來ませんわ、妾は是れから最う三四年みつちり勉強する積りですから、其間は勉強以外の事は何も考へ度くないの、一心不亂に行くところまで行つて見たいんです」と、蘭子は此處まで云うて熱と健三の顔色を窺ふた。

健三は腕を組み兩眼を閉ちて無言で聽いて居たが、所謂足に暇なき水禽の、心は非常に騒いでゐた。

「兎に角目的だけの勉強をした上、立派に卒業した上では又甚麽お話しをするとも、此處では一時取消して戴きたいの、而して是れからは同郷の親友として兄妹同様な交際がして戴きたいの、妻貴方を本統の兄様とも思ふわ」と、蘭子は立派に自分の意志を言明した。

唯見たところだけでは、什麼にも優しい大聲では物も云ひかねるやうにも見える蘭子ではあるが、女學校を卒業して多少の素養を得てゐるのと、未來は交際社會の女王に成らう、貴婦人社會の大達者に成らうと云ふ希望を持つてゐるだけに、斯うと決心さへすると随分思切つた事も云ひ得るのであつた、それも單に蘭子の意志ばかりであつたなら、斯うまでチキバキした言は流石に健三に向つては言ひ得なかつたであらうが、蘭子は今日伊東咲子に健三の事を話したのであつたが、咲子は蘭子の

意志が最う健三にないなら此際立派に約束を取消して了ふ談判をして置かねば後の不利益であると、蘭子をして今夜此處へ斯うした話しを仕に來るやう勸告したのであつた。

「成程松本の云ふ通りだッ」と、健三は突然叫んだ。

「何です松本ッて？」

「いや此方の事です」と健三は苦笑した。

「そりや約束を取消せといふなら取消しても可いですが、何うせ僕は是れから先寂しい一生を暮さうと決心したんだから、しかし那麽を取消すと、同時に貴嬢と僕との交際は斷絶する譯で」

「何故？」

「解りませんか、貴嬢にそれが」

「解らないわ其様なこと、那麽なお約束をするまで二人は親友だつたぢやありませんか」

んか、其れなら約束を取消したら又元の親友に戻るのぢやなくつて」
 あゝ水！氷！！ それより更に／＼冷たい言葉だと健三は思った。
 「よろしい貴嬢が爾ういふ考へなら其れでもよろしい」と、健三は堪へ難き心の苦悶を紛らさうと勉めて、喫みたくもない茶を喫んだり、煙草を吹かしたりした。
 蘭子は其時女王のやうな威厳を持った眼で凝乎と健三を瞞めて、
 「ぢや這の談は最う是でよませう、貴方もいろ／＼仰しやり度い事があるでせうが、何程伺つても同じですからお互ひに此事は再び云出しつこなしにね、ほゝ、慥らないで頂戴よ里村さん」と蘭子は女優のやうな表情を顔に顯して舞踊のやうな品な身體につくつて見せた、何といふ美しさであらう、何といふ憎らしさであらう。
 健三は掌中へのせられて揉んだり丸めたりしられるやうな氣がした、何か云ひたいやうな氣もしたが、咽喉が詰つて聲が出なかつた、頭が朦朧として夢を見てゐるやうな氣がした、蘭子は未だ何か自分を慰めるやうな言を、殊更に優しい聲で云つた

やうでもあつたが、健三は其れが何であるか確乎と意識する事が出来なかつた。
 「ぢや妾失禮してよ、左様なら」
 蘭子が低頭をして階下へ降りて行くのを無言で送つて出たが、再び二階へ歸つて來ると、彼は頭を抱へて机の上へ俯伏した、
 「糞、畜生、畜生、残念だ、残念だ」と忍び音に泣出した。

(二二八)

健三は泣きながら悶えながら思つた、
 「あゝ實に残念だ、蘭子と僕との間は決して斯うした結果になる筈では無かつたのだ、僕が蘭子を愛するよりも蘭子は僕を愛してゐたのだ、一昨年の秋から約二年間、僕と蘭子は甚麼甘い憧憬に酔うてゐたらう、渡月橋の月を仰いで未來を約束する前から、二人の心と心は互ひにゆるしてゐたのだ、僕は蘭子のためには甚麼東西をも

犠牲にせうと思つた、蘭子も屹と爾う思つてゐたのに相違ない、而して這の双愛の交りや誓ひが自ら省みて疚しいものではなかつた、僕の双親、蘭子の父も其れを認めめてゐたのだから。

それが何うだ、今度蘭子が出京してから遽に心が變つて、僕に對して昨日一昨日の冷たい舉動で未だ足らず、態々自分の方から出向いて來てまで那麽ことを云ふ、不思議だ、實に不思議だ、魔がさしたのか、氣が狂つたのか、僕には分らない、あゝ残念だ、實に残念だ、僕は戀を失ふた、命をかけて愛する人から見放された、死命を制せられた、里村健三の肉體は其儘であるが、精神は殺されて了つた、僕は最う

現世に何の希望もない』

若し此時の健三の舉動を人が見てゐたなら、必と發狂したと思ふであらう、彼は幾度も立つたり坐つたりした、其れでも未だ足らずに、狭い部屋中をグル／＼歩き廻つた、實際狂人の所爲に近かつた。

あゝ健三は僅か一二時間の中に松本の忠告を忘れて了つたのであらうか、いや彼は決して其れを忘れたのではない、今夜若し蘭子が來なかつたならば、先刻△△亭で松本に誓つたやうに、斷然蘭子の事は諦めて復讐の大努力をしたであらうが、蘭子の人を魅するやうな艶な姿を見たばかりに、折角引締めた心の駒の手綱はゆるんで、又元の戀に泣き戀に笑ふ弱い／＼里村健三に逆戻りしたのだ。

或る目的を遂行するためには戀をも捨てる、人をも犠牲にするといふ、強い男子的な點は寧ろ蘭子の方にあつた、蘭子が男で健三が女であつたなら、斯うした悲劇は起らなかつたであらう。

一時間以上も煩悶してゐたが、健三は何うしても心を鎮める事が出来なかつた、帽子掛の帽子を取つて頭へのせると、狂的に室の外へ出た、

『僕一寸其處まで出て來ますよ』

二階を降りると、茶の間に内儀さんが居たので、無我夢中で斯う云つて表へ飛出し

た、赤門前の廣い通りへ出ると、涼しい寧ろ冷かな秋の夜風がさつと袂を拂うて、まん圓い月が大分高く昇つてゐた。

固より何處へ行かうといふ目的があつて出たのではない、夢現狂といつて、夢の中でさまざまの行動をする人のやうに、健三は足に任して町を駆廻つた、

「残念だ、實に残念だ」
時々口の中で斯う呟いて、本郷の通りから萬世橋へ出て、向ふ柳原を兩國まで歩いた。

「渡月橋で見た月も丁度恁麼に冴えてゐた」

健三は橋の上で天を仰いだ、天は水のやうに澄んで夜の河風がひや〜と身に迫つた。

(二九)

赤い信號燈を掲げた終電車が通り過ぎてからは、兩國橋は急に寂しくなつて人通りが全く絶えて了つた、けれども健三は未だこの橋の上を去らなかつた、彼は先刻から此橋の人道を、西から東へ、東から西へ、行きつ戻りつ幾度往來したか數へ切れなかつた、更けるにつれて月の光は愈々冴え澄んだ、その光が水に碎けてキラ〜と金波を走らす景色が何とも云へなかつた、兩岸の家々でも大抵最う寝て了つたと見えて、先刻まで見えてゐた燈火のかがが其れから其れへと漸次に消えて了つた、而して今まで聞えなかつた水音が高く聞えて來た、健三の身體は夜露でシットリ濡れてゐた。

健三は鐵の欄干に凭れて月を仰いだ、月は今半ば白い雲に吞まれて、雲の脚が非常に疾やかかつた。

この水がモット〜淺くて、流れの其處此處に河原があつて、あの龜清の高い屋根が嵐山であつたら、それから此橋が恁麼立派な新式の鐵橋でなく、昔風の風雅な木

橋だつたらと、健三は愚にもつかぬ事を思つて嵯峨の月の夜を思ひ出してゐた、那の時那麼約束をしなかつたら、斯うした情けない思ひはなかつたらうなど考へた、何といふ事はなしに涙が糸筋のやうに頬をつたふた。

健三は能く意志の薄弱な青年が考へるやうな、人生の意義といつたやうな事を考へて見た、豪傑氣取りの松本の云ふやうに、非常な努力を以て功名とか富貴とかを贏ち獲てからが人生僅か五十年、富貴も功名も死とは伴はぬではないか、殊に青春の時季は春の花のバツと開いてバツと散るやうに極めて短いではないか、その短い時季を美しい戀もせず青春の慾望も充たさず、夢の様に過して了ふのが善いのであらうか、戀を捨て、人生に何れだけの意義があらう、恐らく零になるのぢやなからうか、零だ、零だ、人は知らず、蘭子といふ戀人に去られた自分の心も全然空虚と成つて了つた！

松本の意見に従つて自分が成功する、而して蘭子の虚榮心を羨ました處で、自分に

は何れだけの快心がある、戀を失ふた自分は依然として寂しい悲しい孤獨ではないか、あゝ孤獨、是れから先の長い光陰を孤獨の生涯で泣いて暮さうより、此儘死んで了つた方が遙に優つてはゐまいか、死、あゝ死！

健三は遽に死にたくなつて凝乎と水を見下した、雲に隠れた月の光は、此時水の面を黒く見せてゐた、深い黒い水の底、其處には總ての苦痛や悲哀を忘れる宮殿があるやうに思はれた。

『死だ、死の外に道はない、僕が死だら蘭子は始めて自分の無情であつた事を悟るだらう、而して憐れな僕のために泣いて呉れるだらう』

健三はトウ／＼死神に魅かれて了つた、長い間水を見下してゐたが、間斷なく流れる水を見てゐると、自分の身體が最う此世界を離れてしまいく／＼に空の上へ昇つて行くやうに、氣がふわり／＼と遠く成つて來るのを覺えた。

再び月が雲から顔を出して、水面は鏡のやうに輝いた、此水、此月、健三の眼には

最う月と水との外には甚麼東西も見えなかつた、其時、本所の方から誰やら人の來るやうな登音がしたので健三は慌て、欄干に足を掛けた、同時に里村健三といふ一個の肉塊は橋の欄干から宙に躍つて、寂寞たる夜の空氣を破つてさつと高い水音がした。

(三〇)

戀を失うて人生を無意義と觀じ去つた里村健三は、トウ／＼身を躍らして兩國の橋の上から飛込んで了つた、果して健三が思ふやうに、深い黒い水の底には總ての苦痛や悲哀を忘れる事の出来る宮殿があつたであらうか。

健三は自分の身體が水を潜つた時、あゝ是れが人生の終局であると思つた、ガブガブと口からも鼻からも一時に水を呑んだかと思ふと、非常な苦痛を胸と頭に感じて、最う氣は遠く成つて了つた、宮殿どころではない、暗い／＼限りない暗い世界へさ

まよつてゆくのだ。

「占めた／＼、御前最う大丈夫です、動いて來ました」

「おう何うか正氣に歸りさうぢや」

「呼んで遣りませう」

「むゝ其れが可い」

「おゝい、おゝい、確乎しなせえ、若えの確乎しなせえ」

「や唸り出したぞ、鐵、貴様その脇のところを確乎持つてゐろ、今少し斯うして水を吐かせるから」

恁麼聲が健三の耳に徹に遠い處から聞えた、オイー／＼と自分を呼ぶやうな聲がだん／＼近付いて來たと思ふと、眞紅な一團の火光が眼の前に見えた。

「むゝん、あツ苦しい」と我知らず叫んで健三は正氣に復した。

「おう氣が付いたな、確乎するが可か」

「あゝ難有え〜、何だつてお前さん身なんか投げたんだい、驚かせるぢやねえか」
 自分を介抱してゐて呉れた人が右左から斯ういふのを健三は意識した、而して四邊
 を見廻すと、自分は何時の間にもやら一艘の網船の上へ救けられてゐて、髯の黒い紳士
 らしい人物と、船頭らしい男とに手厚い介抱を受けてゐるのであつた、水は悠々と
 して流れ、月は依然として空に輝いてゐた。

「何うちや氣が付いたらう、確乎しなさい、今興奮劑を服ませるから」と、紳士は
 手づから小さな杯へ酒を一杯ついで飲ませて呉れた。

それを服むと健三は急に元氣が恢復したやうに感じた、而して濡れた着物に夜の河
 風がいかにも寒い。

「ふむ震ふとるな、待て〜」と紳士は頷いて、

「鐵、もつと其火を燃さぬか」

「御前、もう燃すものがねえんで」

「はゝゝ悉な焚いて了つたか」と紳士は軽く笑つた。

「兎に角寒からうから、その濡れたものを脱いで、爾うちやこれを着なさるが可い」
 と、親切に其邊に脱捨てゝあつた自分の着物を着せてくれた。

「むゝ其れで可い〜」と紳士は満足げに頷いて、始めて香氣の高い葉巻をくゆ
 らした。

「鐵、此人は一時俺の許へ連れて行くことにして、最う今夜は是れ切りで歸らう」

「えゝ其れがようがす、何だつて人間てえ大漁をしたんだからね」
 船頭を櫓を操つて徐に船を上流へ漕出した。

健三は未だ意識が明瞭でないのか、何だか夢を見て居るやうな心地がしてゐた。

(三三)

「遠慮する事は要らん、静かにして其處へ寢轉んどるが可か」

紳士は唯斯う云つたばかりで、船が月に光る流れを何處までも逆上り、吾妻橋も越して向島の堤を右に眺めて、橋場だらうと思ふトある岸へ着くまで、一言も口を利かうと仕なかつた。

健三は助けられた禮を述べたが、紳士が投身の原因に就いては一言も訊ねて呉れぬので、其れを自分の方から云ふのも耻かしく、云はるゝまゝに狭い舟の片隅に身を横にしてゐたが、懸て命せられる儘に、小さな棧橋から陸へ上つて、紳士の後方から廣い〱邸内へ入つた時、健三は始めて紳士の身分の常人でないといふ事に氣が付いた。

廣い邸宅の間毎には電燈が輝いてゐて、いかにも明るい生活が想像された、健三は十六七の侍女らしい婦人に案内しられて、京都の花園村に生れて中農の家に育つた身には、曾て見た事も想像した事もない立派な一室へ入つたが、間もなく紳士は着物を更めてノソリ〱と出て來た、

「何うかの、少しは落着いたかな」

前の侍女が直していつた褥の上へ徐に坐つて、緩く葉巻の煙を吹出した容貌態度が、何となく重々しくて自然と頭を押へられるやうに感じた。

「は、いろ〱御手厚い御介抱に預りまして、面目もございません」と、健三は續けさまに二三度低頭をした。

「は、爾う禮を云はれては却つて迷惑ぢやが、全體何うしたのぢやな、大切な生命を自ら縮めやうといふには、容易ならぬ事情があるぢやらう、斯うして測らず足下をお助けしたのも何かの因縁ぢやらう、悪くは計らはぬから、一つ話して見ちや何うぢや」

話すなと云はれても、命を救はれた大恩人に包み隠すことが何うして出來やうと健三は思つた。

紳士は重ねて、

「足下も無闇に他に自分の内情を洩らすことは苦痛ぢやらう、然し私は構はぬものぢや、足下の不爲に成る者でない事だけは安心してゐられるが可か、私は此頃この橋場の別荘に隠居して漁師同様の生活をしとる、遠山信道といふものぢや」と云つた。

遠山信道と聞いて健三は非常に驚いた、當時新聞を讀むほどの者で、從二位勳一等伯爵遠山信道の名を知らぬものはなかつた、前内閣の内務大臣として、某政黨の黒幕總理として遠山伯の名は日本國中に雷と轟いてゐた、斯うした偉大な人に生命を救けられるとは何とした事であらうと、健三は自己の運命の不思議を疑はずには居られなかつた、健三は只もう恐縮して了つてモヂくしてゐて容易に口が利けなくなつた、其れを見て伯爵は高い聲で笑つた、

「はゝゝはゝゝ、何を其様なに躊躇しとるんか、足下も是れ堂々たる青年でないか、人の前で碌に自己の意志が話し得ぬやうでは人間にはなれぬぞ、勇氣を出せ勇氣を、

死を決するほどの勇氣と膽力とを持つとりながら何といふ事ぢや、はゝはゝ」
餘程夜が更けてゐるので、邸宅の中は森閑としてゐた。

(113)

健三はどつしりとして威嚴のある、而して眼光の爛々と輝いた、一見豪傑肌の伯爵の前で、女々しい戀物語をするのが什麼も愧かしかつた、しかし其れを話さねば自分が死を決した原因は分らぬので、いや斯ういふ人の前で少しでも偽り飾る處があつてはならぬと思つて、赤面しながらオド／＼として其れを話した、勿論、自分の素性や來歴は包まず話したが、蘭子の事に就ては唯「同郷の或る婦人」と云つて其他を語らなかつた。

其れを具に聽了つた伯爵は突然高い聲を出して笑つた。

「はゝゝ、はゝゝ、莫迦ぢやのう足下は大莫迦者ぢや」

「はい」
「はいぢやないぞ、其れ位な事で人間最も大切な命を棄てやうとするなどは大莫迦者ぢや」

「はい……………」

「人の生命は爾う安價なものぢやない、成程、棄てるべき場合には惜しんではならぬが、棄てべからざる時に捨てやうとするのは罪惡ぢや」

「はい」

「まあ能く考へて見い、問題が實に些々たる一婦人に關した事ぢやないか、一婦人に欺かれたから現世が遠に厭になるなぞといふは、私共から見ると實に滑稽な思想ぢや、私共の若い時には婦人の事などは口へ出して話す事も大なる男兒の恥辱としてゐたものぢや、友達の中に爾ういふ奴があると、寄つてたかつて打据ゑたものぢや」

「は……………」

「戀とか愛とかいふ問題は薬にしたくも聽く事を得なかつた、其代りに寄れば天下國家に就て論じた、相撲をとる柔術をやる、地獄汁と名づけて、眞暗な中で大鍋に味噌汁をたいて置いて、各自持寄りの肴をソレへ打込んで暗黒の中で食ふたものぢや、誰が何を入れたか少しも分らぬ、其處が趣味のある處で面白い處ぢや、中に酷い奴があつて雪駄の裏革を入れて置いた奴があつた、其れを或る男が一生懸命に噛み乍ら「こりや何ちゆう肴ぢやろか、眞逆に硬かもんばい」といつてトゥ〜食つて了つたといふ談もある、斯ういふ風ぢやから、一般に青年の志氣は振つて居つた、いざ天下の大事といふと忽ち一かどの役に立つたもんぢや」

伯爵は恁麼ことを話して、

「今の青年は其れと反對で、小利巧ではあるが柔弱で可かぬ、意志が薄弱で膽力に乏しい、だから事に當つて何の役にも立たない、詰る處何かに囚はれて思想が不知

不識不健全になるのぢやナ、困つたものぢや」
伯爵は嘆息するやうな吐息をした。

「私には一人足下のやうな莫迦な伴があつて、今は勘當同様家には居らぬが、困つたものぢや、足下なども平素心の修養が足らぬから、其様な管らん問題で死にたくもなつたのぢやらう」

健三は唯恐縮するの他はなかつた。

「しかし何程小言を云つても最う濟んだ事は詮方がないが……、何うぢやな足下は那の時私が船を寄せて助けてやらなかつたら大抵は死でゐたのぢや」

「はい」

「死で了へば最うその婦人の問題も甚麽も無くなつて了ふたのぢや、爾うぢやらう」

「はい」

「那の時死で了つたと思つて、是れから一つ新しい生涯に入つて見る氣はないか

の、私共の若い時のやうな心持に成つて、一婦人に献げる熱情を、一つ日本國といふ國のために献げて見ては何うぢやな、縁あつて足下を救つたのぢやで、私は足下が其心持に成られるなら、是れから私の書生として一番肌を脱いで見やうと思ふが、何ぢや」

健三は嬉しさと難有さに涙が濡れた。

(117)

健三は其翌日から遠山伯爵家の書生と成つた、夜が明けると改めて伯爵の居間へ呼出され、

「奥、これが昨夜鳥渡話した里村健三といふ男ぢや、今日から宅の書生だ能く眼を掛て遣つてくれ」と伯爵から夫人に紹介はされた。

伯爵夫人は四十七八とも見える極めて穩順な女大學式の貴婦人で、優しい眼つきや

慎ましやかな態度が、當時政界の彗星として多くの敵味方を持つ大豪傑の奥方とは思はれぬ程であつた。

健三は又この優しい夫人の聲掛りで、峰山といふ家扶と、古部、有川、白木などいふ家從兼書生に紹介された、而して仲働きや小間使の女共にも一々紹介された、健三は偶然の事から伯爵ほどの大人物に知られ、今日からその家族の一員として斯うした待遇を受けるのを、身に餘る光榮と心に感謝した。

伯爵は河や山の漁獵をするのと、若い書生を養ふのが何よりも道樂であるといふので、伯爵家では書生を非常に大切に待遇してゐた、古部有川白木なども相當の部屋をあてがはれ、用事の餘暇には各自其一室へ立籠つて心長閑に勉強してゐた、健三も亦彼等と同じやうに、表玄關に隣つた四疊半の一室を日常起臥の居間として許された、而して當分來客の取次をする事を其身の役目と定められた。

花園村の中農の家に生れて山や野を野獸のやうに驅廻つて來た身が、今斯うして堂

堂たる伯爵家の一員となつて見ると——たとひ玄關番の書生にもせよ——いや會て見た事も聞いた事もない、上流社會の家庭に入つて見ると、自然と自分の氣位までが高くなつたやうな氣がした、家に屬する總ての調度や、人に對する總ての禮儀や作法が、故郷の花園村や下宿屋の二階とは大分異つてゐた。

伯爵は去年政界を退いてから、大に思ふ處があるといつて、麴町の本邸には留守居を置いて、この橋場の別荘へ夫人や令嬢を伴つて引退して了つた、我には一竿の風月あるのみと、出来る丈來客を謝して毎日隅田川の流れへ船を浮べ、釣魚をしたり網を打つたりしてゐた、それでも名士の門前常に市をなして來客は引きも切らなかつたので、取次役の健三は相應に忙がしい思ひをした。

來る人も見る人も、苟くも伯爵家の門をくゞる程の人物は、何れも堂々たる一かどの紳士ばかりで、中には新聞紙で毎度名を唄はれる朝野の大人物も尠くなかつた、健三は是等の人に接してゐる中、自分も一度は那歴した人物に成つて！ といふや

うな是れまでには餘り頭腦に浮ばなかつた一種の向上心が閃めいた、而して此處へ來てからも時々思ひ出してゐた蘭子の事などは、月日の經つに従つて餘り考へなくなつて了つた。

(三四)

それから一年程の間は何の異つた話もなかつた、いや健三は這の一年間に自分でも驚くばかりに思想の變化を來した、一年前の健三は法學を研究するよりも寧ろ文學に走つた方が成功しはすまいかと思はれるばかり、空想家で而して感情家であつたが、それが今では非常な實際家に成つて、而して法律家らしい冷靜な頭腦を持つて來た、秋の野に咲く草花や蘭子の美貌に憧憬た曩の日は全く反對に、所謂の花より團子といふ實利主義に走つて、一日も疾く相當の地位を占めて社會に立ちたいと思つた、日にち毎日伯爵家を訪づれて來る人のやうに、馬車や自動車には乗れぬま

でも、切めては護謨輪の自動車で飛ばしたいと希ふた、一年間の境遇が彼を變化させたのか、戀人蘭子の無情を怨むの餘りが斯うした別方面に想ひを走らせたのか、其れは彼自身にも分らなかつた。

「や、不不變大々的勉強をやつとるな」

扉の外から恚う聲を掛けてノソノ健三の勉強室へ入つて來たのは、彼の親友で自ら當代の豪傑を以て任じてる松本剛であつた。

「いや爾うでもないよ」と、健三は今まで讀んでゐた法律書を片寄せて、

「さあ何うぞ」と主人らしく席に招じた。

松本は例の無遠慮に、むんづと胡坐を搔いて四邊を眺めながら、

「其様なに勉強して何うしやうといふんだ、は、ま、あ少し戶外を見るが可い、時は秋なり、天高うして馬肥えたりだ、實に好い時候だぜ」と笑つた、

「爾うだねえ、大分好い氣候になつたから人が出るだらう」

「出るともく、吾輩は今観音の境内を抜けて来たが、日曜の故でもあらうが大變な人出だ」

「ちや相變らず電車に乗らずに徒歩でやつて来たんだね」

「勿論！ 吾輩は脚といふものを持つとる、電車なんかに乗るもんかい」

「君の健脚にも驚くからねえ」

「む、健脚といへば吾輩此の間本郷の下宿を出て、巢鴨から染井、あれから雑司ヶ谷の方を廻つて、江戸川縁へ出て歸つて来たがね、雑司ヶ谷で面白い事件にぶつかつたぜ」

「ふむ、誰かと喧嘩でも仕たのか？」

「喧嘩、いかにも喧嘩だ、其れが不思議に吾輩がした喧嘩ぢやないんだ、他が仕てゐた喧嘩なんだ」

「何だ詰らない、他の喧嘩など、は、は、」と健三は可笑しくなつて思はず笑つた。

「ところが其喧嘩が普通の喧嘩ぢやないんだ、實に愉快な喧嘩で、貴様に聞かしてやる價值がある喧嘩だからねえ」

「ふむ、そりや何ういふ譯でだ」

「何ういふ譯つて、貴様のためには一年前の戀人、其人のためには吾輩の忠告をも忘れ、兩國橋からドンブリやつた怨みの主久米蘭子が喧嘩をしてゐたんだからねえ」
蘭子と聞いて健三はいやな氣がした、最う全治つてゐる古傷を、指先へ強い力を入れて壓されるやうな氣持がした。

(三五)

主人伯爵閣下の着古しらしいフランネルの單衣を着て、青千筋の暑寒平の袴を穿いた什麼も眞面目臭い姿で、片腕を机に凭せて稍身を斜に、松本の敷島を失敬して頻りに煙を吹いてゐた健三は一種不快な色を浮べて冷笑した。

「ふゝん其様ことは聴きたくもない」と事もなげに斥けたことは斥けたけれど「ふむ爾うか」といつて若し松本が其儘口を噤んで了つたら何うしやうといふやうな氣もした、聴きたくないと云つても聴きたい心は充分に動いてゐるのだ、幸ひに松本は其談を歇めなかつた、

「莫迦ぬかせ、聴きたくないなんて、其様なこと云つたつて、ハイ左様でございませうかと引込むやうな松本剛ぢやない、はゝゝはゝゝ、何うだ里村」

松本は健三を揶揄して置いて、

「冗談は冗談として、事實僕も驚いた、彼の婦人が他と那麼争論をせうとは意想の外だつたからねえ」

「甚麼争論してたんだ？」と健三はツイ釣込まれた。

「其れが愉快なんだ、そら貴様も知つとるだらう、鬼子母神の奥の院、何とかいふ寺だッけねえ、御祖師様を安置つてる寺だ」

「むゝ何時か大分前に幹のところから怪火が出て巳の事に焼けて了はうとしたといふ、大銀杏の樹のあるところだらう」

「それだ、その奥に開運威光天といふ稻荷の祠があるだらう」

「吾輩秋の色を充分眺めやうと思つてその稻荷の祠の方へぶら／＼登つて行つたんだ、すると吾輩の立つてる處から右の方に十五六歩離れた樹の影で人の争ふ聲がしたから、何心なく此方から見ると、女學生らしい奴が三人ゐるんだ、何れも大變なハイカツた服装をした奴で、面して其中の一人が彼女と來てゐた」

「成程」

「久米さん、貴女は何てまあ不徳な方なんでせう、と一方の奴が彼女に詰寄ると、一人の奴が其尾に従いて、久米さん黙つてないで何とか返答して下さい、最初貴女を内村さんに紹介したのは妾だから、貴女が其様な不明瞭な態度を執つて下さると

妾が困ります、といふのだ」
 是れだけ聞いた健三は女學生が蘭子の友人の伊東咲子と内村久子であるといふだけは分つたが、争ひの原因が何であるかは分らなかつた。
 「吾輩も別に立聽をする氣ではなかつたけれど、何分其中の一人が貴様の舊愛人だと思ふので、聴くともなしに赤い華表の蔭に身をよせて聴いてゐると、二人は右左から熾んに彼女を攻撃したが、詰りその攻撃の要領は、彼女が曾て内村から三十圓用立て、貰つたんだ、ところが返済するといふ約束の時期が來ても返済どころか、成るべく内村等から遠ざかつて寄附かぬやうにするので、内村等は今までにも二三度彼女を捉へて面責したが、其都度口先ばかりで旨い事を云つて、ちつとも其れを實行しないといふ事だ、其れで其日も伊東と内村二人が測らず護國寺前の電車の終點で彼女を見掛けたのを幸ひ、無理から雜司ヶ谷の奥へ連込んで最後の談判を開いてゐる處らしかつた」

松本は此處まで話して一息吐いた。
 「ちや借りた金の催促を受けてゐたんだね」と健三は思はず口走つたが、月々二十圓といふ學資を給されてゐる蘭子が、何の必要があつて三十圓などいふ金を友人から借りたか、また其れを借りて置いて返さぬといふのは何ういふ理由であらう、若しや、
 「蘭子は墮落したんちやなからうか」といふ疑問が頭腦に閃めいたので、
 「それで結局喧嘩は何う成つたんだ？」と訊ねた、
 「其處だ、是れからが肝腎のところになるんだ、里村、彼女は實にひどい事をする奴だぞ！」

(三六)

健三の部屋は橋場の通りに面した、伯爵家の門を入つて正面の、純日本式の大玄関

に隣つた一室であるので、此所の窓からは隅田川の流れは見えぬが、何處かの學生が端艇の練習をしてるのであらう、午後三時の静かな秋の空気がつたうて、調子をつくつた權の音が遙に聞えた。

「静かだね、今日は伯は留守か」

松本は思ひ出したやうに訊いた、

「うむ御不在だ、此頃は江戸川で鱧が漁獲るといふので、船頭の鐵が御供で昨日から小利根行だ、それから奥様とお嬢様は今朝から御親類へお出掛けに成つて、其れで邸内は此通り静閑なんだ」と健三は返答したが、其様な事よりも疾く蘭子と咲子等の争ひの結末が聞きたかつた。

「爾うか、道理で莫迦に淋しいと思つたよ、伯は此頃政界に意を得ぬので太公望を氣取つてるんだね、内心は野心勃勃だらうが、は、は、は、」

「何うして、野心などが有るもんか、伯爵は實は公明正大でゐらせられるからねえ」

「ゐらせられるか、は、は、は、貴様も大分變つたね、は、は、は、權門富家の使用人になると何となく人間が臭くなるぞ、里村少し注意せんと可かんぞッ」

「ふ、其れから何うしたね、その争論の結果は？」と、健三は談を元の處へ引寄せて來た。

「蘭子の一件か、は、は、は、矢張り聴きたがるね」と松本は豪傑笑ひをして肩を揺つたが、

「結局借金の事は彼女が向ふ二十日間の猶豫を乞うて漸と一段落ついたやうだが、それからが面白いんだ」

「面白いッて、何うしたんだ？」

「内村といふのが、それから久米さん一寸伺ひますが、貴女は近日この雜司ヶ谷邊で澤藤さんと同棲なさるッて噂ですが事實ですか、と訊くんだ、すると伊東といふのが、内村さん其様なこと新らしく訊くだけが野暮よ、澤藤さんと久米さんの間は

最う疾くに醜關係が成立してゐるんぢやなくつて、この雜司ヶ谷は閑靜でもあり目白の學校へも近いし、其上世を忍ぶに都合の好い場所だからツてね、ほゝ、ほゝ、今日も其のために態々此邊へ家でも捜しに來たんでせう、臭い物と臭い物が寄るのは當然よ、と斯う罵倒したんだ、罵倒しられた彼女は怒つたね、佛然として伊東を睨んで、臭い物と臭い物とは誰の事を仰しやるのです、醜關係とは何の事です、貴女こそ澤藤さんとは以前醜關係を結んでゐたといふぢやありませんか、大抵に人を白痴にしてお置きなさい、とやり返すと、伊東は自分の胸で蘭子の胸を押すやうな態度で、何です、今一遍云つて御覽なさい、貴女は甚麼口を持つて、爾うした事が云へるんです、妾と澤藤さんが以前何ういふ間柄であつたか、其様な事は貴女のお指圖は受けなくつてよ、では訊きますが貴女は其れを知りつゝ後から來て、先の者を突退けて何したのですか、不徳、不信、貴女は肉慾の奴隷ねえ、と罵つた、何うだい里村、呆れたらう、其れから二人は少時罵り合つてゐたが、吾輩も何だ、爾う

した下等な争ひを聴くには堪へなかつたので、其儘其處を去つて了つたから、跡は何ういふ事になつたか知らないが、何しろ大概の要領は得てゐる、要するに彼女は過去一年間に全然墮落して了つたんだね』
 松本はカラ／＼と笑つて、例の調子で現代の女學生を旺んに攻撃した、而して最後に、
 「吾輩なんざあ妻を娶る時には、先づ學校出は眞平御免といふのを第一條件にするね」と結んだ。
 「むゝ爾うかねえ、驚いたねえ、君本統だらうねえ、僕を欺いでるんぢやなからうねえ」と健三は餘りの意外に恚念を押さずにはゐられなかつた。
 「莫迦、誰が欺ぎなんかするもんかい」と松本は事もなげに笑つてゐた。

其時、廊下に面して障子が静に開いて、

「里村さんお茶を入れてまゐりました」と、十六七の色の黒い女が番茶器と今戸名物の鹽煎餅を盛つた盆とを持って來たが、其れを其處へ置くと松本に向つて叮嚀に低頭をした上、帯の間に挟んでゐた封書を取出した。

「それから只今郵便が……」

「あゝ爾うでしたか、難有う」

健三は手早く其郵便を取上げたが、差出人の名を見て鳥渡顔色を變へた。

松本は其れには氣も付かず、什麼も華族の侍女らしい禮儀正しい會釋を殘して出て去つた女を、むづかしい顔をして凝乎と見送つてゐたが、女が最う遠く臺所へ行き着いたと思ふ頃、彼は堪へくゝてゐた相格を俄にくづして、

「ふゝゝ、驚いたね、實に驚いた、何だい彼女は？」

「彼女とは？」

「今こゝへ來た女さ」

「此家の侍女さ、其れが何うした」と健三は上の空で反問しながら頻りに手紙を讀んでゐた。

「はゝゝ、何うも仕ないが、驚くぢやないか彼の面ア、何といふ面なんだ、色は眞黒だし、鼻は低いし口は大いし、第一眼の工合が何とも云へない、瞳子の据り工合が什麼も不思議で、何處を見てるのか更に見當が付いてゐないぢやないか、はゝゝはゝゝ」

健三は漸く手紙を讀み了つて軽い溜息を吐いた。

「はゝゝ、彼女か、そりや可笑しな顔をしてるよ」

「可笑しいにも何にも、非常な醜婦ぢやないか、遠山伯とも云はれる人の家に何故那麼化物を置いてるんだらう」

「それには大に理由があるがね」と、健三は氣のない返辭をして何か考へ込んでゐ

るのだ。

「理由がある？ ふむ、全體何ういふ理由だ、真逆那麼婦人が伯の縁者といふ譯ちやあるまい」

「其れは無論だ、君此家の令嬢を見た事があるかい？」と健三は讀んで了つた手紙を封筒に納めた。

「無い、甚麼婦人だ、美人だらう」

健三は女が持つて來た茶を其時始めて松本についでやり、自分も飲んだ、焙茶の高い薫りが四邊に流れた。

「まあ煎餅でも摘み給へ、は、は、は」

「何が可笑しいんだ、いやに笑ふぢやないか」と、松本は煎餅をポリ、食べてゐた。

「實はね君、此處の令嬢が非常な醜婦なんだ」

「何だ詰らない、は、は、は」

「醜な上に、誰でも婦人には痼性の嫉妬心が烈しいと思ひ給へ、それで此處の家では令嬢のために美人の女中は一切置かぬ事に成つてゐるんだ、令嬢と較べて見劣りするやうに、成るべく醜なのを選んで置く規則だから、彼女に限らず此家の若い女は悉な醜い奴ばかりさ、は、は、は」

「なる程、昔時の吉田御殿と云つた風だね、伯は其様な令嬢を可愛がつてるんかい」

「うむ、伯も無論可愛がつておるでになるが、伯爵よりも夫人が非常に愛しておるでになつて、令嬢のためには眼も鼻もないんだからねえ、従つて伯もお愛しになるんだ、其れに何時かも鳥渡話したツけが、此家の令息は放蕩家で、二三年前から表面伯爵の勘當を受けて家出をしてゐられるといふので……尤も内々は夫人から月不自由のないやうに給與はしてゐられるが……爾うした譯で一入令嬢をお愛し

になるんだ」

健三は恁麼ことを話した上、今自分が机の上へ置いた手紙に眼を移した、

「ところで君、不思議な手紙が来たよ」

「その郵便かい」

「うむ、噂をすれば影で、蘭子の親父から来たんだが、まあ君讀んで見給へ、彼の女の墮落といふ事は最う故郷へも聞えてる模様だ」と、健三は其郵便を松本の前へ投出した。

(三八)

拜啓、時下秋冷相催し候處彌々御清適御勉學の由奉大賀候、殊に承り候處に依つては、貴下には昨年の秋より遠山伯爵閣下の知遇を受けられ、閣下の書生として法學御專攻の趣、前途御多望の段羨望の至りに堪へず候、降而老生其後不相變

屬吏奉職碌々として洛西の片隅に老の至るを相數へ居り候御憐笑被下度候。

却說平素は非常なる御疎遠に打過ぎ居りながら、突然斯様なる儀御願ひ申候事餘りに勝手個間敷くは御座候得共、積年の御懇意且は同郷の因縁に甘へ、特に貴下が御一臂の勢に預り度、敢て御勉學御繁忙中とは承知致しながら、左に其要を摘記致し候間何分の御配慮伏而奉懇願候。

豫て御承知の如く、娘蘭子儀昨年女子大學へ入學致し、先は人並に勉學致居り候處、如何の所存に有之候ふにや、本年春頃より屢々定めたる學資以外の送金を追り來り、尤も其當時四五回は彼が申す儘に送金致し遣はし候へども、度を重ね候ふ請求に際限も無御座候ふ儘、先々月限り斷然送金不致、其上少々老生に所存も有之、定額の學資も差停め候處、親に對して怨みがましき書狀相送り候を最後として、爾來杳として何の消息も不致、其不孝、其不埒、言語に絶し候ふ次第に御座候、如斯き不孝者は最早や子として顧るも心外には御座候得共、世に謂ふ燒野

の雉子夜の鶴とやらにて、當人に向つては一時勘當を宣告は致候うても、親心流石に心に相寛り候ふ節もなきにあらす、當人に於て改心の實さへ相示し候ふ上は、從來の如く定額の學資丈は送り遣し度く、其邊の事情御賢察被下、當人が昨今の起居動作及び品行等其れとなく御取調べの上、密々老生へ御一報相叶ひまじく候や、尙當人へ御面會の機會も御座候ふ節は、貴下より、嚴しく御訓戒願上度此儀折入つて御依頼申上候、不幸にして一人の男子なく女子のみを子とする老生の心情幾重にも御憐察願上候……………

蘭子の父から健三に宛てた手紙といふには這麼文言が書いてあつた、それを讀み了つて徐に巻き納めてゐる松本の眼には露が浮んでゐた。

「何う思ふね、君は其手紙を？ 何うしたら可いだらう」と、健三は不安な落着かぬ眼光をして凝乎と友の顔を瞻た。

「爾うさねえ、この手紙の模様ぢや、親父は非常に彼女の身上を氣遣つてるやうだ

が……………」

「親父の請求通り彼女の近狀を取調べて遣つたものだらうか、其れとも體よく斷つたものだらうか……………」

「うむ、しかし深く君を信用してると見えて、這麼耻かしい手紙まで書いて報告して呉れと頼んでるんだから、構ふ事はない、事實其儘報じて遣つたら可からう、可哀さうに此の手紙には不孝な不埒な子を持つた親の心持が痛切に出てゐる、蘭子といふ奴も困つた代物ぢやないかい」と、松本は嘆息した。

「其れも爾うだね、けれども僕は君も知つてる通り、蘭子といふ婦人には甚麼事があつても再び交際する考へを持つてないんだから、成るべくは恁麼事は斷つて了ひたいんだが、蘭子は兎に角、親父には何の罪もないんだから、氣の休まるやうに何とか報告して遣らう……………」

「それが可い、しかし貴様失戀の怨みを報ずる機會だと思つて、餘り酷烈な事を書

いて遣つちや、可哀さうだぞ、はゝゝ」

「莫迦な」

健三は苦笑して急に窓の外を見た。

其時、門前が遽に騒がしくなつて、大地を蹴る鐵蹄の音と、馬車の車輪の響とが騒騒しく近づいて、氣の利いた扮装をした馬丁が威勢よく駆込で來て、

「お歸りッ」と、叫んだ。

「おゝ夫人がお歸りだ、君鳥渡失敬する」と、健三は松本を置去りに周章で玄關へ飛出した、無論それは夫人を出迎への爲めであつた。

「はゝゝ莫迦な野郎だ、伯爵家の書生になると那麽にペココ仕なけりやならないのかしら」

松本は鹽煎餅をガリ／＼噛みながら嘲笑つてゐた。

(三九)

後れてゐるのか進んでゐるのか、現代の青年とは何處かに異つた點のある松本、昔の薩摩隼人のやうな豪傑振つた氣分を持つてゐる松本剛の眼には、健三の斯うした阿諛めいた軽い舉動が氣に入らなかつた、否、健三の忠義振つた甲斐々々しい立廻りが莫迦々々しく見えて堪らなかつた、而して彼は忘々しうに鹽煎餅を喰つてゐたが、別に爲る事もないので、窓の硝子戸越に門から玄關の方を眺めるのであつた。間もなく門を入つた二頭立の幌馬車は玄關前で停つた、松本は夫人と令嬢が馬車から降りるところを熟々見て可笑しく思つた、夫人は四十五六の神經質らしい女で、別にはぞといふ特徴もない什麼も華族の奥様らしい婦人であつたが、令嬢の方は松本の眼に深刻な印象を與へた、花であつたら今が盛りといふ十七八、けれども其花は婀娜たる櫻の嬋妍もない、妖々たる桃の艶色もない、晩秋の野に咲く醜草の醜花

で、あはれに見る影もないのだ、脊は低く横太りに肥満つてゐて、色だけは雪のやうに白いけれども、眼は象のやうに小さく、鼻はおそろしく低い、殊にその細い眼の上に断崖のやうに額が出張つてゐる、兩の眼は谿谷のやうに深く、凹んでゐるのだ、唯そればかりならば未だ見好くもあらうが、右の額から頬へかけて火傷でもした痕らしい大形の疵痕がピカ／＼光つてゐて、それが他に限りなき不快を與へるのである、恁麼に容姿は醜いが、頭の裝飾や着てゐるものは中々華美なもので縮緬地に紫勝つた矢緋の袷衣や、煌々金色の光のする厚板の帯などが、遺憾なく其人に不調和を示して、寧ろ情けなく見られた。

「ふむ、成程こいつは恐縮した」

松本がニヤリと笑つて心裏で呟いた時、玄關の方から令嬢の聲らしい、那麽醜容にも似ぬ晴々とした涼しい聲が高々と聞えて、出迎ひの女中共に取巻かれて行くらしく、大勢の足音が奥の方へ遠ざかつて行つた、健三もあの中に混つてゐるのだと思つ

て、松本は再び苦笑を禁じ得なかつた。

物の五分許りも経つてから、健三は前よりも明るい顔をして戻つて来た、

「やあ失敬々々、君茶を入れ換へて来やうか」

「いや最うい、吾輩は歸る」

「未だい、ちやないか、今少し話し給へな、僕は最う用も何もないんだから」

「何だか俺は貴様の三太夫的態度を見たら不快に成つたから歸る」

「真迦云てらア、は、は、は、何うだ令嬢を見たかい？」と、笑つた健三の聲は他聞を憚つたらしく小さかつた、

「うむ見た、實に驚いたねえ、は、は、は」

「驚いたらう、しかしアレで學校の成績は中々好いんだぜ」

「何だか知らないが阿麼ちや將來が案じられるね、恐らく誰だつて御免を蒙るだらう」

「可い、那麽人なんか何うでも、貴方一人が食べた方が好くつてよ」
「それでも折角のお土産ですもの、彼にも食べさせて遣りたかつたです、私何よりも是が好物ですからねえ」

「だから私持つて歸つたのよ、親切でせう」

健三は其れには答へず、籠を大切さうに机の上へ置いて、

「水天宮へ御参詣でしたか」と談を反らした。

「え、麴町の伯母さんを訪問して、其れから水天宮様へ廻つたの、今日は戌の日の水天宮で大變な人だつたわ」と令嬢は無格構な身體にしやなりと品をして見せた、其れが健三の眼に情けなくも哀れに見えた。

「最う鐘橋のところまで来ると、人で人で逆も馬車なんか進まない位なのよ、其中を漸との思ひで少し行くと最う車止なの、其れから母様と二人で人に押されおされお参りして、最う歸りませうつて母様の仰しやるのを、貴方にこれが持つて来て進げ

たいばかりに、母様におねだりして人形町の方へ歩いたのよ、全く親切でせう」と、聲には力が入つて、象のやうな小さな眼には燃えるやうな強い光が見えた。

「は、全く御親切です」

健三は詮方なしに斯う云つた、いや何うしても斯う返答せずには居られなく仕向けられたのだ。

「ほ、親切でせう、しかし貴方は冷淡ねえ」

「其様な事ありません、何故です？」

「何故つて、貴方の心に聞けば分るわ」と令嬢は睨んだ。

「須磨子や、須磨さんや！」

奥の方から呼ぶ母夫人の聲が聞えた、けれども令嬢は返辭をしやうともせず立上らうともしないで、

「私爾う思つてよ、貴方といふ人に今少し熱情つてもものがあつたら、其れこそ申し分

はないんだけれど、什麼も冷淡で水のやうだわ、法律家ツて者爾うしたものなの？」

「困りましたねえ、其様な御質問」

「須磨さん、須磨さん！」と夫人の聲は又聞えた、續いて、

「お嬢様、奥様がお召し遊ばしますよ」といふ女中の聲がして、此方へ来る模様だ。

「奥様がお呼びださうです」と健三も注意した。

「蒼蠅いのねえ」と、須磨子は醜い顔を一入醜く擧めて、肥満した五體を什麼も重

さうに起上つた。

「ほゝゝモット苛めて進げやうと思つたんだが、今日は堪忍してあげるわ、覺えて
わらつしやい、性悪、いゝッ」と、厚い唇の中から白い前歯を露はして顔を突出し
た、而して高い笑聲を残してバタ／＼と奥へ駆けて行つた。

斯うした我儘な氣隨らしい、而して無邪氣なやうな態度の須磨子が、若し蘭子のや
うな美人であつたなら何れ丈人を引付けたか知れないのであらうが、醜い須磨子で

は何の力も無いと健三は思つた。

(四一)

「おやマアお珍らしい、貴方は確か里村さんでしたねえ、久米さんなら貴方三月程
前から手前共には居らつしやらないんですよ、しかしマアお上りなさいまし、其れ
に就いていろ／＼お話しもごさいますから、さあ何うぞ、失禮ですが何うぞ此方へ」
健三がいやく／＼ながら滿一年振りで蘭子の下宿を訪ねた時、例の多辯な堀川の細君
は能く健三を覺えてゐて、愛想よく茶の間へ案内した。

「しかし久米さんは何處へ引越したか此方でお分りに成つてゐるでせう」と、健三は
長火鉢から少し離れたところへチヨコナンと坐つて、極り悪さうに巻煙草を喫み喫
み斯う訊ねた、

「さあ其處なんですよ貴方、久米さんも随分な方ぢやございませんか、貴方も御存

じの通り、那麽に手前共でいろ／＼お世話致して居りましたのに、何處へ越すとも仰しやらずに出て行つ了ひなすつたんですよ」と、細君は意味ありげな顔をしてニヤ／＼笑ひつゝ、火鉢の火をいらけたり茶を入れたりした、而して蘭子の事をいろいろと話した、

「恁麼こと申しちや何ですが、久米さんは全く何うかなすつたんですよ、あれは何時でしたッけね、さう／＼七月の末でした、手前共に少々下宿料の滞りがありましたので、私共が其れとなく御催促を致しましたら、大層貴方御立腹なさいましてね、小母さんは故郷の父へ何か云つて遣つたらうツて仰しやいますの」

「はア、其れは何うした譯なのです」

「何ね、久米さんが餘りお金使ひが荒いもんですから、お國のお父さんがお怒りなすつて御送金なさらなく成つたのですとさ」

「實は僕も其事で來たのですがね」と、健三は蘭子の父から依頼状を受取つた事を

話した、

「おやマア爾うでございましたか、其様なにお國ぢや御心配なすつてゐらつしやるんですか、そりや爾うでせうねえ、何だつて貴方大事のお嬢様のお心が狂つたのですからねえ」

先刻からの細君の容子といひ、その言葉には什麼も綾があるらしいので、健三は此の細君の口から過去一年間の蘭子の平生を聞いて見たいやうな氣に成つて、

「それで何ですか、下宿料の催促をしられたのが癢だと云ふので引移したのですかと遠廻しに探りを入れて見た。

細君はこの質問を得たり畏し待つてましたといつたやうな顔付をして、そろ／＼得意の辯舌を揮ひ出した。

「まあ爾う申したやうな調子です、ほ／＼ほ／＼、其れから貴方其翌日何處で工面してゐらしたのか、十六七圓残つて居りました下宿料を全然お拂ひなすつた上、

小母さん長々お世話に成りましたが私は是れから都合で轉宿しますッてね、遽に行李を苧縄で括るやら机を持出すやら大騒動をして出て行つ了ひなすつたの。」

「成程、それで何處へ越すとも行先を云はないんですね」

「え、何程伺つても仰しやらないんですよ、此家の小父さんや小母さんは私の事を何かと故郷へ報告なさるからッて、嫌味たらしくでね、鐵砲玉のやうに飛ん了つた切り今に音沙汰なしでさア、おほ、」

「訝しいですねえ、久米さんは其様な人ぢやなかつたがなア」

「爾うですとも貴方、去年始めて手前共へおいでなすつた時は、それは、温順な御惻發な好いお嬢様だつたのですがねえ、矢張り朱に交れば何だとか云つて、お友達が悪かつたので那麽にお成りだつたのでせう、何だつて貴方悪い虫が付きましたからねえ」

健三は胸がドキリとした、而して思はず眼を睜つて細君を瞻た、

「悪い虫といふと？」

(四二)

「ほ、貴方お知りなさらないでせうねえ、久米さんの男のお友達」

「知りませんねえ、那の何とか云ふ、爾うだ、澤藤とかいふ大學生ぢやないですか」

「え、其れです、その大學生の澤藤、其れが中々な喰はせ者なのです、表面は極く真面目を装つて立派な學生面をしてゐますが、何うして、大變な色魔だつて申すことです、おほ、」

「色魔？ 爾うですか」

健三は甚しい不快を感じた、自分の顔色が急に曇つたといふ事は自分にも氣が付いたので、其れを隠すために無暗と煙草の煙を吹出した。

能辯家の細君は此方の感情が何うあらうとも、其様な事は一切無頓着で、

「大學生といふのも實は眞赤な嘘ださうで、彼方此方の女學生を誘惑するのを稼業のやうにしてるといふ噂ですよほ、眞逆其れ程でもありませんまいが、久米さんは其様な善くないお友達を信用してらつしやる上に貴方、女のお友達には、内村久子さんとか、羽田時子さんとかいふ故郷には厭といふ程お金のある方があるもんだから、其處は矢張り女の弱點ですわ、友達が笑しい服装をしてりや自分も眞似が仕て見たからうちやありませんか、久米さんだつて其れで、恁麼羽織が流行することの、恁麼模様様の帯が最新式だこと、斯う申しちや何ですか、身分不相應な贅澤な眞似をなすつて、三越だの白木だのつて其様な方に許り浮身を窶してゐらつしやるもんですから、お金なら何程あつても足らなからうちやありませんか」

「はア爾うですかねえ」

「ですから貴方、種々な口實を拵へてお國のお父さんに送金しろ、送金しろでせう、お國だつて堪らないちやありませんか、其れを私や主人が見兼ねて其れとはなしに

度々御忠告したんでしたけれど、馬の耳に御經ほどの利目もないんですから詮方がありませんわ」

是れ丈聽いて健三は最う大抵の容子が分つたので、其れ以上は聽きたくはなかつたが、細君の能辯は何時果てるか知れなかつた、現に今目前に見てゐるやうに、今年の一月頃から轉宿するまでの蘭子の平生、いや單に平生といふよりも淺ましい墮落の徑路を話して聞かした。

詰り細君の觀察した處では、蘭子は元來學問は嫌ひではない、嫌ひではないから學校へは能く通つた、甚麼ことがあつても理由なく學校を休むといふ事だけは仕なかつたけれども、美麗な衣が着たい、華族の姫様や富豪の嬢様の眞似が仕て見たい、帝劇だの歌舞伎だのが缺かさず見に行きたい、而して年中極く陽氣に極く華なやかに暮して、誰の眼からも自分を偉い人美しい人と見られたいといふ、さうした慾望の火が絶えず胸に燃えてゐて、その慾望の火に不知不識其身を焼かれて、心にもな

い墮落の淵へ漸次々々に沈んで行つたのであるといふのだ。
 其中に主人の康人も役所から歸つて来て、

「蘭子さんに就ては私も非常に心配しました、それほどまでに御懇意といふ仲でもなかつたですが、以前同じ役所に奉職してゐたといふ關係から、蘭子さんを宅へお預りするやうな事に成つたのですが、アレでは何うする事も出来ません、私共の云ふ事などは取上げなさいのぢやからな、非常に自尊心の高い方で、私共夫婦はテンから眼中にないのですからなア、折角一年足らず宅にお置き申したゝめ、却つて久米さんの御親父に私共が怨まれるやうな勘定に成つて了つたのです」と、愚痴をこぼすやうな嘆息するやうな事を云つた。

健三は其夜遅くまで起きてゐて蘭子の父に手紙を書いた、差當り蘭子の所在が何處といふ見當も付かぬので、手紙には其旨を認めて、追て當人の居所が知れ次第親しく面會した上で、改めて御報告する機会もあらうと付け加へた。

(四三)

墮落！ 女學生の墮落！ 何といふ忌はしい言葉であらう、斯うした忌はしい辭を、固より自分の愛を蹂躪つた敵ではあるが、彼の美しい優しい蘭子の上に冠せねばならぬとは何たる情けない事か、平常から自己といふものを信ずる事の堅い、感情よりも、理性の優れた、而して婦人のやうでもなく絶えず或の種の功名心に燃えてゐる蘭子が、堀川の細君が謂ふやうに、僅か半歳か一年許りの間に、爾う易々と墮落し得るものであらうか。

それから後の健三は斯ういふ問題で大分脳味噌を費消つた、須磨子の所謂何事も冷淡に過ぎる近頃の健三としては、不思議なほど此の問題には頭腦を絞つた、一週間ほどの間は暇さへあれば、其事を考へてゐた、寒暑の氣候の換り目に古い昔の傷痕が痛むやうに、一旦兩國の水に流して了つた蘭子に對する彼の思ひが、蘭子の父

から依頼状を受取り、一年振り堀川の細君から蘭子のことを聞いたといふ動機から、又候芽をふきだしたのではあるまいか、健三自身にも適當な解釋を下すことが出来なかつた。

兎に角論より證據といふ事がある、斯うした事は何よりも實地に當つて觀察するの
が捷徑である、而して少しも誤謬のないところを蘭子の父に報して遣るのが、手紙の
返辭は親切にして遣れよと松本の注意して呉れた言葉にも叶ふのであると思つて、
健三は學校へ出る時間を平素より一時間早めて伯爵邸を出た、それは透明るほど空
の澄亘つて、冷たい風のスイ〜と吹く或る朝であつた。

青千筋の暑寒平の袴を穿いて、伯爵閣下の着古しのフランネルの單衣に白い襟の襦
袢を重ねた健三の姿は、それから四十分程の後小石川の護國寺前の電車の終點に現
れた、紫だの紫紺だの、袴を穿いた女子大學生らしいのや、眞言宗豊山大學の制服
を着た學生やらの群に混つて電車から降りた健三は、雜記帳や法律書を入れた毛襦

子の風呂敷包を小脇に、烏打帽を被つて細い櫻の洋杖を振り〜、豊山大學の前を
眞直に、青柳橋を渡つて細い雜司ヶ谷の町をスタコラ歩いて、寢て女子大學の裏門
前へ來た。

健三は鳥渡立停つて躊躇したが、其時自分の後方から來た四五人連の女生が裏門へ
入るのを見て、

「あのウ鳥渡伺ひますが、大學の事務所へ行くのは何方へ行きますか？」と、帽子の
底に手をかけて訊いて見た。

「事務所なら此處を眞直に行つて、ちよいと右へ曲れば入口があります」と其中の
年長らしいのが教へて呉れた。

「難有う」と健三は軽く低頭をしたことはしたが、女ばかりの行く學校を態々尋ね
て行く自分を、何となく氣恥かしく思つて、あの女生共に何とか思はれはすまいか
といふやうな、極めて初心らしい臆病な心が起つた。

それでも健三は教へられた通りに歩いて事務所へ入つた、而して受附で、
 「少し伺ひますが、久米蘭子といふ人の宿所がお分りに成つてゐるでせうか」と今度
 は帽子をとつて訊いた。

「久米さん、久米さんといふと？」

色の黒い眼のキヨロリとした束髪が斯う云つてジロ／＼健三を見た。

健三は頗る極りの悪いのを堪へて、

「當校の生徒の久米蘭子といふのです」と重ねて訊いた。

「あゝ爾うですか、鳥渡お待ちなさい」

受附は其儘椅子を離れて幹事らしい人の前へ行つて何事か云つてゐたが、間もなく
 厚い帳簿を持つて来て、それを健三の前で披きながら、

「久米さんなら高田村字雑司ヶ谷七十五番地です、護國寺の裏手ださうですよ、し
 かし今日は来てゐらつしやるでせう」と教へて呉れた。

「ナニ面會ぢやないです、宿所が知れ、ば可いので、難有う」と辯解らしい挨拶を
 して又裏門の方へ出た。

裏門の前は女子大學の寄宿舎で、その廣い晴々とした構内を斜に抜けると、直ぐ雑
 司ヶ谷の野へ出る、それが高田の通りへ出たり、後へ引返すよりも近道であるとい
 ふことは、曾て此邊を散歩して能く知つてゐたので、健三は其儘寄宿舎の構内へ入
 つて綺麗に掃除のしてある砂利道をザク／＼歩いてゐた。

すると彼方から先刻から見たのとは大分異つた、非常に華美な服装をした、帝劇な
 どの舞臺の上で見る女學生のやうなのが、何を考へてゐるのか、一生懸命に下を見
 詰めながら此方へ近づいた。

「おゝ蘭子さん、久米さん」

健三は直ぐ其女學生が蘭子であると氣付いて聲を掛けた。

蘭子の方では突然自分の名を呼んだ者が健三であると氣付いた時、思はず胸がドキ
ンとして顔が熱つたやうに覺えた。

「まあ！ 里村さん！」

何處へ行くとも何用で恁麼ところを通つてゐるとも問ふ心の餘裕がなく、少し胸を
反らし目に、鈴を張つたやうな眼を睜つて棒のやうに突立つた、

「いや暫らくでしたね蘭子さん、是れから學校ですか」と、健三は近寄つて什麼も
眞面目腐つた調子であつた。

この突差の間に双方の頭腦は輪轉機のやうに旋轉した、月の渡月橋、あの時の事は
云ふに及ばず、二人が東京へ來てからの出來事は電光石火と描き出された、けれど
も蘭子も健三も其れを口に出しては決して云はなかつた。

「え」と双の眼に多情な表情を示して頷いた蘭子は、

「貴方は？」と、此に至つて始めて問ふた、而して漸く胸の鎮まつた事を自覺した、

「僕は今學校で貴女の宿所を聞いて來たところです、是れから伺はうと思つて」

「おや爾う、何か御用なの？」

「はア急に鳥渡」と云つたが、健三は遽に言葉を改めて、

「此處でお目に蒐れば別段貴女の許まで往かなくつても可んです、何うです十分間
許り、構ひませんか」と、健三は話しをするに適當な場所もがなと四邊を物色した。

「ちや少し其邊を散歩させよう」と、蘭子は健三の返答のない中に、急に踵を返し
て、サツサと元來の方へ歩き出した、健三も無言で其後方に従ふた。

應て二人は寄宿舎構内を雜司ヶ谷の野へ出た、右を見ると遙かに護國寺の森が見え
て、その鬱蒼と繁茂つた中から如意輪觀音堂の高い屋根が聳えて見えた、前は一面
の田圃で、眞實に熟した稻は残らず刈取られて、それが干してあつた、眞實に見え

る大根畑で白い手拭で頬被りをした百姓が立つたり屈んだりして頬に大根の虫を取つてゐた、何處でかチチチと百舌鳥の鳴く聲が、あゝ秋だなといふ感じを人の頭に刻み込んだ。

二人は少時無言で細い野路を歩いた、

「朝の雜司ヶ谷、好い景色でせう」

蘭子は恚う云つて路傍の短くなつた枯草の上へ躊躇んだ、朝の露がまだ乾かずに居るのも構はず。

「爾うです、中々好い」と健三も詮方なしに爾う云つて、自分は其傍につくねんと立つてゐた、

「恚麼ところを二人で散歩するの久し振りだわねえ」と、蘭子は獨言のやうに云つて、彼方の丘の上の牧場を見てゐた、牧場には白と黒の斑毛の乳牛が五六頭ゐて、それが其處からは大な犬位に見えた。

少時黙つて何か考へてゐた蘭子は、急に下から見上げて話しかけた、

「貴方今橋場の遠山伯の別荘に居らつしやるさうですねえ」

「何うして知つてるんです？」

「父の手紙で、疾くに」

「さうですか」と健三は頷いたが、續いて蘭子が彼の時の事を聽いて呉れるかと私に期待した、けれども蘭子が又口を噤んで了つたので、何だか痒いところへ手のとどかぬやうな氣がした。

何時まで立つてゐても蘭子が一向動きさうな容子を見せないの、健三は聊か魂負けをした形で、

「實は僕が今日來たのも何です、貴方のお父さんからお手紙を戴いたからです、兎に角これを御覽下さい」と、懷中から蘭子の父の手紙を出して示した、

「父から貴方に？ 手紙？」

「え、読んで御覧になれば釋ります」

(四五)

蹲踞んで手紙を讀んでゐる蘭子も、立つた儘凝乎と其れを見てゐる健三も、秋の野の冷たい風に吹かれてゐるので、煌々と輝く強い太陽の光を全身に浴びても、さして暑いといふ感じはしなかつた、

「何ういふ返事を仕たら可でせう？」

健三は蘭子の手紙を讀了つた時、態と斯う訊ねて見た。

蘭子はシロリと其顔を見上げて手紙を健三に返した、

「何とでも、ほ、」

「僕はこのお返事に少々困つてるので、兎に角貴女に會つて見た上と思つて、今日態々此方へやつて來たんですが」

「難有う」

「貴女實際お父さんに手紙進げないんですか」

「え、」

「何故進げないんです？」

「父が妾の要求を容れて呉れないからですわ、學資も送つて呉れませんか……」

「では最うお父さんの世話には成らないといふ御決心ですか」

「え、」

「しかしお父さんは貴女には手紙で甚麽事を云はれたかは知らんが、陰では恁麼に心配してゐらつしやるんですが、其れが貴女にお分りに成りませんか」

「分つてますわ、ですけど里村さん、妾は最う那麽な釋らない父の世話には成らないと決心しましたの」

「何故です？」

「爾うちやありませんか、妾の家の財産は誰の有です、一朝父が亡くなれば當然妾の有でせう」

「まあ爾う云つた道理ですが……」

「それを惜むといふのは何ういふ理由でせう、月々何程と極めた學資の他に餘分な要求をしたからと云つて、墮落をしたの何のつて云ふのは酷いぢやありませんか、而してバツタリ極つた學資まで停めて了ふといふのは餘りでせう」

「成程」

「誰が父に甚麽事を云つて遣つたかは知りませんが、妾が斯うしてるのは、矢張り其れ相當に田舎で考へてゐるよりヨリ以上のお金が必要すわ、將來當然自分の有になるなら、今其れを使ふも先で使ふも同じ事ぢやありませんか、妾が成功するために要する費用なら何程減つたつて構はないぢやありませんか、立派に成功さへすりや、其れン許りの金なんか直ぐ取返しがつくのですもの、其れが分らないやうな

父なら、妾強つて厄介に成り度くはありませんわ、何處までも父なんかの束縛は受けないで獨立獨行して行きます、ヤレ品行が何うだことの、學生として餘り贅澤が過ぎるだことの、其様な窮屈な小さな點にまで長上の壓迫は受け度くないんですから、妾には妾の主義と主張があることよ、其れに據つて他日立派に社會に立つて行く積りですから、妾といふものを能く知つて呉れない父なんか、其様な囚はれた人の世話になんか成らなくつても可いんです」

滔々と述べ來つた蘭子の双の眼は燃えるやうで、氣煽容易に當るべからずである、「何程困つたつて構ひません、また困りも仕ませんし、父に返事をお出しなさるなら、其様な風の意味で云つて遣つて下さい、妾もう決心してるんですから」と犯し難い權威を其美しい顔に示して屹と健三を瞻た。

「いや其れで貴女のお考へは能く分りました」

と健三は投出すやうに云つてホツと溜息を吐いた。

健三のやうな男には、斯うした蘭子の議論を善いとも悪いとも判断する事が出来なかつた、一應道理なやうにも聞かれ、また更に道理に叶はぬやうにも聞かれた、而して何だか煙に捲かれたやうな気がした、唯、僅か一年の間見なかつた間に、何うして恁麼に亂暴に成つたのだらうと怪んだ、恁麼ことを男子の前で臆面もなく云ふやうに成つたのも、要するに澤藤とかいふ墮落生と交つた結果であらう、して見ると堀川の細君の言葉も全然否認する事は出来ない、いや現に鬼子母神の奥の稻荷で、松本がおそろしい醜態を見たといふではないか、など、思つた。

「態々来て下すつた御用ていふのは、唯これだけ？」

莞爾笑つて、頬にかゝる束髪の後れ毛を指の先で搔上げて徐に立上つた蘭子の姿が、謂ふに謂はれぬほど艶であつた。

「まあ爾うです、しかし蘭子さん、尙ほ能くお考へなさるが宜いですよ、而して成るべくは一度お父さんに手紙をね、僕からも其れとなく貴女の御意見は何しませんが」

「え、難有う」

「別に厭味を云ふんぢやないですが、僕は去年貴女から絶交同然の宣告を受けた身ですから、恁麼こと云ふ資格はないか知れませんが、斯うしたお父さんの御手紙があつたもんですから」

「あら那麼こと」と蘭子は少しく顔を赤めて、

「貴方あの時の事未だ慍つてらして、堪忍して頂戴ね、妾那麼に貴方を何させやうと思つて云つたんぢやないのよ、ね、釋つてるでせう」と、今滔々と論じた時とは全く別人のやうに、什麼も懐かしげな表情をして染々と健三を瞻入つた。

恁麼表情をしられると、健三は遽に胸が騒ぎ出した、一旦断念した一年前の心に又立戻つたのぢやなからうかと、自分でも怪しまれるほど心が動き出したので、其れ

を鎮靜けるため、蘭子の前を右左にそろく歩きながら、

「それも能く分つてます、しかし今日の僕は去年の里村ぢやないですから、はゝゝはゝゝ」と、可笑しくもないのに強て笑つた、

「はゝゝゝ」と蘭子も笑つて、

「ぢや里村さん妾これで失禮してよ、學校が急ぎますから」

「あゝ爾うでしたな、手間をとらして失敬しました」と、健三は夢から覺めたやうに挨拶をした、

「ぢや何れ其中にね、左様なら！」

蘭子は其儘其處に健三を置去りにしたまゝ、サツサと元へ取つて返して再び寄宿舎の構内へ入つた。

それを凝乎と見送つた健三は、何だか遺失物をしたやうな心持でもあり、狐に化されたやうな氣もしたが、

「なんだ他を莫迦にしたやうな、しかし待てよ、折角此處まで来たんだ、序に今居るところは甚麼家か見て遣らう、幸ひ番地を聞いて来たんだから」

斯う思ひ付いて健三は田圃道を横切つて護國寺の方へ急いだ。

蘭子の方は若しや健三が後から尾けて來はせぬかと思つて、先刻健三に近づいた邊りで屹と後方を振向いた、けれども健三の姿の見える筈はなかつた、其代りに横手の方からツカ〜と出て來た人があつた、

「久米さん、是れから？」と優しい聲を掛けたのは、學校でも生徒間に極めて評判の好い増山芳江子といふ幹事で、彼女は何處までも優しい笑顔で、

「丁度久米さんに好い處でお目に蒐りました、貴女に少しお話し致したいことがあるんですよ、烏渡此處の寄宿舎の應接間を借りやうぢやございませんか」

「は、何うぞ」

何の裝飾もない寄宿舎の應接間に、古い卓子と粗末な椅子が三脚ばかり置いてあつた、増山芳江子は其一脚に徐かに腰を下して、

「さあ久米さん、貴女も其處へお掛けなさい」と、持て居た書籍の包みを卓子の上へ載せて前の椅子を指さした。

東の窓から差込む日光が、半ば卓子の上を、半ば何も敷いてない床の上を斜めに照してゐた、晝の寄宿舎の静寂さは山奥の尼寺へでも行つたやうで、何の音もなく森閑と鎮まり返つてゐた。

蘭子は平素から此の増山幹事の、優しい思ひやりの深い、大勢の生徒を我子か妹のやうに、親切に導いてゆく、眞に教育者として缺點のない女神の如き慈愛心に心から服してゐた、その女神のやうな人が、殊更人の居ない慇懃ところへ自分を連込ん

で話しがあると云はれるのは、若しやー 若しや妾のー と何となく胸が騒いで薄氣味悪くて堪らなくなつた。

不安な眼光をしておどく椅子に腰を掛けた此時の蘭子には、平素の活々とした元氣はなかつた。

増山幹事は其れを覺つてか覺らずにか、やがて四十に近い、眼の細い鼻のつんむりした細面の、什麼も優しげな女性らしい顔をいよく優しくして凝乎と蘭子を瞻入つた、蘭子はその優しい眼の光が今日に限つて目眩いやうに感じて不知不識首を垂れた。

「ほ、何だか陰氣ですわねえ、この應接間は」と増山幹事は莞爾笑つて、

「慇懃ところへ来て戴いて改まつてお話しするほどの事でもないのですがね、私此間から何となく臍に落ちぬ事があるので、其れを貴女に伺ひたいと思ひましてねえ」とそろ／＼談の端緒が引出された。

「といふのは他ぢやないですが、此頃の貴女の成績ですがねえ」
成績と聞いて蘭子はハツと思つた、何うしても顔を上げて正面から幹事を見上げる事が出来ないやうな気がした。

「私は爾う思つてました、貴女のやうに勉強で而して成績の良好な方は這の學校でも、全級を通じて五人とはないと、何時か校長先生にも爾う申したことです……」

増山幹事は此處まで云つて急に口を噤んだ、而して少時蘭子の容子を見てゐたが、
「それが何ういふ理由ですか、此の頃は、爾うですねえ、こゝ二三ヶ月前から急に不良にお成りだし、それに是れまでには滅多となかつた缺席も時々なされるやうでもあり、貴女何か御一身上に御心配が出来たのではありませんか、若し爾うしたことがお有りなさるのなら、御腹藏なく私までお洩しは出来ませんか、私決して貴女のお爲に悪くは計らひませんから」と斯う云つて蘭子の返答を待つてゐた。

蘭子は借はと思つて、平生の活潑な氣象にも似ず、舌が硬張たやうで早速の返答が出なかつた、何故此頃は成績が悪いのか、其れは幹事に訊ねられるまでもなく自分も知つてゐる、斯う云はるれば犇々と胸に當る甚麽東西があるけれども、其れを明らかに幹事の前で告白することが何うして出来やう。

一時火のやうに赤くした蘭子の顔は漸次に血の氣を失つて來た、
「いろ／＼御親切に……、しかし妾別に何も無いのです……」
「別に何も？」

「は、成績に關するほど心配事なんか少ともないんですけれど……」
「しかし何か他に有るのですか、鳥渡したことが、ほゝゝ」

「實は故郷の方に少々……、それで妾の學資にも影響するやうな事件が……」
蘭子は漸との思ひで苦しい辯解をした、人間斯うした場合に全然嘘は云へぬもので、偽りの中にも多少は似たり寄つたりの事實が含んでゐた。

「まあお國に？」

増山幹事は同情の深い眼で染々蘭子を見た、而して慈悲深い親が子を慰めるやうな聲で、

「果してねえ、爾うした御事情があたりだつたのですか、しかしネエ久米さん、恚麼立入つた事を私から申すのも何ですけれども、若しお國の方の御都合で、貴女の學業に打撃を受けるやうな場合がおありのやうでしたら、又御相談に依つては何とか成らうぢやございませんか、是れは私個人の考へですけれど、學校には優等生の中から人数を限つて貸費生にする規定もありますから、久米さん、大切な學業中に心を他に走らすやうな事なしにねえ、何うか一生懸命に勉強して以前のやうな優良な成績を擧げて下さい、私一丁箇で確乎としたお約束する事は不可能ですが、追て御事

情によつては及ぶ限り貴女の御便利を計るやうに御盡力致しますから」と、何處までも赤心の籠つた同情のある忠告をした。

蘭子は斯うした優しい幹事の言葉を聽くに従つて、少時の間も他を偽る自分の罪が可怖しいやうに感ぜられた。

「はい、いろ／＼難有うございます、故郷の方の事も近日落着する筈ですから、元のやうに勉強致します」と云つた聲が自分にも慄へてゐるのが分つた、増山幹事は幾度も頷いて、

「何うぞねえ、強い意志で勉強して下さい、貴女は職員一同が望みを屬してゐる方なのですから」と云つた上、書籍を包める中から一葉の葉書を出して、

「それからねえ久米さん、昨日突然恚麼物が學校へ舞込んで來ましたの、何れ誰かの惡戯だらうとは思ひますが、其れとも貴女誰かに遺恨を含まれるやうなお覺えがありますか」

増山幹事の手から葉書を受取つた蘭子の顔の色は忽ち變つた、その葉書にはペンの走り書で、

あゝ大學、あゝ大學、女子の最高學府たる貴大學にも如斯亂行墮落の學生ありや、友人に三十圓の金を借りて更に辨濟の義務を果さず、自己の身邊を装ふ化粧のみに汲々として、有らゆる虚飾有らゆる贅澤に其日を送る而已か愛人の男生と同棲して人を人とも思はず、其人姓は久米名は蘭子、敢て貴校職員各位及び學生諸氏に警告す

と書いてあつた、無論差出人は匿名である。

「まあ恁麼もの！」

蘭子は蒼白な顔をして、葉書を凝視めた二重瞼の表情に富んだ双の眼からは、ホロリと露が一滴。

「しかし久米さん、其様なものは學校では誰も取上げはしません、殊にその葉書は

私が昨日の午後郵便脚夫から直接に受取りましたので、未だ誰も見たものはありません、屹と誰か貴女を妬んでる者の善くない悪戯だらうと思つてましたの、其れですから今後の御用心までに貴女にお目に掛けて置きますですよ、ほゝゝ」

幹事は成るべく蘭子の耻入らぬやうな言葉を選んで斯う云つた。

蘭子はこの葉書に對して甚麼辯解を試みやうとしたか、いや、何處までも慈悲心の深い増山幹事は、蘭子の口から葉書の辯解を聴かうとは望まなかつた、蘭子が未だ何も云出さぬ間にツイと立つて卓子から離れた。

「おや頼だ長談をして時間が、久米さん貴女の級の朝の時間は歴史でしたねえ、最う大抵濟んだ時分でせう、お邪魔をしましたことねえ、サア参りませう」と其儘自分から先に扉を排して出て行つた。

歴史の次の時間は家政学の講義であつたが、蘭子は講堂へ入つても講師の談は何が何だか全然頭脳に入らなかつた、平素のやうに雑記帳を擴げてペンに墨汁はつけたけれども、只ペンを持つた手を雑記帳の上に載せてゐるといふばかりで、少しも筆記などは仕なかつた、増山幹事の忠告の言葉が其れから其れへと頭腦の中で繰返されるかと思ふと、故郷の父から健三に來た手紙の事が浮んで腹が立つた、唯それだけでも胸がむしやくしやするのは、何處の何者が自分への悪戯か復讐的か、那麼種類の匿名の投書を學校へ向けてするとは何たる悪辣な手段であらうと、口惜しくもあり悲しくもあつた、何程匿名にしたからつて、投書の主が誰であるかは能く分つてゐる、おのれ人に怨みがあるものか無いものかと屹と教壇の方を睨んで齒をくひしばつた、其中に時間の號鐘が鳴つて講義は終つた。

次の時間も、次の次の時間も、蘭子は唯大勢の同級生と一緒に教場へ入つたといふ名ばかりで、夢現の中に時間を空費して了つた。

學校を出たのは何うして出たか、途中は何處を何う歩いて來たか、殆ど無我夢中で蘭子は自分の家へ歸つた、自分の家といふのも何しいが、蘭子の今の住居は雜司ヶ谷の高臺で、左には護國寺の森が鬱蒼と、前は一面の大根畑で谷を隔て、自分の通ふ學校の屋根が高く見えてゐた、電車が護國寺前まで通じた故でもあらう、此邊は最近遽に開けたところで、この大根畑を中心にして其周圍に勤務人向きの小さな平家建が新築された、その東の一番端の家が蘭子の住居なのだ。

家は六疊と四疊半と三疊の三室のみであるが、それでも庭に見立てた六坪許りの空地には、楓だの杉だの金剛纂などが配置よく植られてゐる、大根畑と庭との境界は建仁寺垣で、門といふと大層に聞えるが、杉の丸木を二本立て、横に自然木を渡した、詰り門に形取つた出入口も風雅に出來てゐる、その門の柱に小形な名刺が二枚貼つてあつた、一枚は無論蘭子のであらうが、一枚は誰のであらう？

蘭子は雑記帳を抱へインキ壺をぶら提げて此の門を入つた、門を入ると直ぐ格子戸

だ、それを音高くカラ〜と開けて三疊の玄關へ上つた、土間に下駄や靴の亂雑に散らばつてゐるのや、古びて黒くなつた玄關の疊、壁には傘やら手拭やらのぶら下つてゐるのなどが、其日ばかりは蘭子の癢に觸つた。

丁度其時、この猫の額に似た庭で、縁日で買つて來たらしい鉢植の菊をいじつてゐた頭を綺麗に分けた青年が、

「何つて、この菊にや虫が附いてるから除つてるのだ、見給へ此虫、恁麼に虫の附着てる奴を賣るなんて失敬な奴ぢやないか」と、夢中に成つて菊の虫を除つてゐた。

「ふ〜ん」と蘭子は鼻で笑つて、袴を脱ぎ放しにして茶の間へ行つたが、直ぐ引返して來て机の前に坐つた、

「貴方お湯もわかつて置かないなんて随分だわねえ」と庭を睨んだ。

「今火をこしらへやうと思つてた處さ、何だか氣焔が高いやうだが何うしたんだい、今日は？」

青年は初めて菊の鉢から離れて上つて來た、問ふまでもなく澤藤進であつた。

「妾今日ほど厭な日はなかつたわ、貴方鳥渡これを見て下さいな」と、蘭子は増山幹事から貰つて來た彼の匿名葉書を投げるやうに澤藤の前へ示した。

(五〇)

この澤藤進といふのは非常な才子肌の男で、健三のやうな沈んだ性質ではなかつた、甚麼場合でも絶えず愉快さうな顔をしてゐて、人と對坐して相手に不快な思ひをさせるといふ事が決して無かつた、明瞭した聲の抑揚のある話し振りが何時も相手の心を自分の方へ惹付けた、而して意志が強いといふのか人物が横着に出來てゐるといふのか、何程自分の心裡に悲しい事や不快な事があつても毛ほども其れを色には顯さないで、常に晴れ晴れとした顔をしてゐる男であつたが、何ういふものか此の葉書を見た時ばかりは少しく眉を曇らして不安さうな顔をした。

「ふむ、酷い事をする奴もあるもんだ、詰り君を學校から何させやうって巧みだね」と、嘆息するやうに云つて密と蘭子の顔色を窺つた。
「妾に何の怨恨があつて恣麼投書をするんでせう、貴方これを書いた者誰だか知つてゐて？」

「さあ誰だらう」

「貴方に分らなくつて？」

「爾うだねえ、鳥渡心當りが無いが、誰だらう、若しか君のほうら、何とか云つたツけね、爾うく、里村健三、非常に君を怨んでるといふ」

「冗談ッ」

蘭子は投げるやうに云つて澤藤を睨んだ、

「里村には今日逢ひました」

「何處で？」

「學校へ訪ねて來たの、妾の父が妾の事を心配して近狀を調べて報して呉れッて依頼狀を寄越したので、態々出て來て妾の意見を聞きに來たの、妾大氣焔を吐いてやつたわ、癩に觸つたから」と今日健三に逢つた容子や、其時自分の云つた事を話して、

「彼の人驚いて歸つて去つたわ、ほゝゝゝ」と小氣味好さうに笑つた。

「それは何時頃だ？」

「今朝よ、九時頃」

「九時頃、ふむ其れで分つた、今朝九時半頃誰だか知らんが此處の前へ來て頻りに内の容子を窺つて行つた奴があつたので、僕は泥棒か何かだらうと思つて、顔を見て遣らうと思つてる間に去つて了つたが、其奴が里村なんだ、ほゝゝ奴さん君の生活を見に來たんだ、はゝはゝ」

「まあ！ 呆れるね、此處へも來て、何故那麼女臭い男なのでせう、妾大嫌ひ、ほ

ほ、だけれど彼の人恣麼投書なんか仕なくつてよ、恣麼事をするのなら今までに仕てる筈だし、それに妾が内村さんに三十圓の義務があることや、貴方と恣うして同棲してゐる事を知つてゐる筈がないわ」

「其れも爾うだね、マア可いさ、誰が仕たつて、其様な惡戯する奴はさせて置けば」
澤藤は敷島の袋から一本出してマツチを摺つた。

「爾うは参りませんわ、妾の學校での信用は零になりますもの」と蘭子は口惜しくて堪らぬといふ表情を澤藤に見せた、實際彼女は口惜しくて堪らぬのだ。

「しかし妾爾う思つてよ、貴方が是れを知らないつて事はない筈だと」
「何故？」

「ほ、空つ恍けても無益よ、この投書をした者は伊東咲子さんだといふ事はチャンと妾に釋つてゐるわ」

「なる程」

「妾と貴方が斯うして居るのが怨めしくつて怨めしくつて堪らないんですわ」
「爾うだらうか」

「爾うですとも、咲子さんは妾の舊友だけれど、向ふから斯う宣戦を布告して來るなら、此方も其覺悟で應戦しなくつちや、其れには此方に弱點があつては何だから、内村さんのを返して了はなけりやならないんだが……」

蘭子は急に顔が曇つた、而して澤藤の顔を覗くやうに見た。

「全體その三十圓といふのは何なの、内村から君が借りたといふのは何時借りたのだ、僕ア些とも知らなかつた」と、澤藤は笑ひながら訊いた。

蘭子は俄に顔を赤めて、

「未だ貴方には話さなかつたけれど、貴方と此處へ斯うして來ない中に、妾頼でもない機會から内村さんに借りたの」

「内村なんか借りなきや可いに、甚麼機會で借りたんだ？」